

戦争体験「語り」の継承とアーカイブ (5)

— 広島市「被爆体験伝承者」と長崎市「交流証言者」を事例として —

外 池 智
(秋田大学教育文化学部)

Study about inheritance of telling war experience (5) - Hiroshima "a-bomb survivors legend" and Nagasaki "Exchange evidence" as a case study-

TONOIKE, Satoshi

Abstract

This study is in published studies on the development of peace education of the next generation using hierarchical archiving working from 2015, continuing research studies on the inheritance of war has promoted research on war-related sites are promoted from the 2009 fiscal year, 2012 year telling.

Age of war after World War II 71 years have passed, and talk about the experience of war if 10-year-old, no longer the population total population 8%. Narrative in such a situation, a direct war experience, not by using the hierarchical archive should be called "peace education of the next generation" so to speak, practice is ever-changing and expanded.

Nagasaki has been approached from the city of Hiroshima last year continue to be tackled from fiscal year 2012 (Heisei 24), such circumstances "a-bomb survivors tradition" and 2014 (Heisei 26) year "Family survivors and take" Exchange witnesses".

Key Word : Study about inheritance of telling war experience, Practice of Hiroshima "a-bomb survivors legend", Nagasaki a-bomb experience about (family and Exchange evidence) promotion project

1. 本研究の目的

本研究は、2009（平成 21）年度から推進している戦争遺跡に関する研究¹、2012（平成 24）年度から推進している戦争体験「語り」の継承に関する研究²の継続研究であり、さらに 2015（平成 27）年度から取り組んでいる継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の展開に関する研究³の一端を発表するものである。

戦後 72 年の歳月が経ち、戦争体験を語れる終戦時の年齢を仮に 10 歳とすれば、もはやその人口は全人口の約 8% となった。こうした状況の中、こうした直接的な戦争体験の「語り」ではなく、継承的アーカイブを活用したいわば「次世代の平和教育⁴」と呼ぶべき実践も、刻々と展開されている。

こうした現況を踏まえ、昨年度に引き続き 2012（平成 24）年度から取り組まれている広島市「被爆体験伝承者」と 2014（平成 26）年度から取り組まれている長崎市「家族証言者」・「交流証言者」を取り上げる。

2. 広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「交流証言者」講話

全国各地で開催されている戦争体験の「語り」の継承やアーカイブは、「語り」による証言を何らかの媒体（文字、音声、映像等）でそのままアーカイブする場合とある特定の養成プログラムを経る事で直接人から人へ継承する試みが行われている。2012（平成 24）年度からの研究では、特に後者に注目し、基本的な継承プログラムの内容構成の調査・分析、そしてその特色を明らかにしていった。取り上げてきた事例は、以下の資料 I-1 の通りである。

この内、一昨年には広島市「被爆体験伝承者」の高岡昌裕氏（講話時 36 歳）⁵、昨年には広島市「被爆体験伝承者」の榎原泰一氏（講話時 40 歳）と、さらに長崎市「家族証言者」の佐藤直子氏（講話時 52 歳）を秋田大学にお呼びして、講話をしていただいた⁶。聴講者は、秋田大学教育文化学部の社会科教育研究室の学生が中心であ

る。今年度は、同じく広島市「被爆体験伝承者」の藤井
資料1-1 戦争体験「語り」の継承プログラム

	事業名	事業主体	期間
広島 (3件)	・「被爆体験伝承者」養成プロジェクト	広島市市民局	2012-
	・「ヒロシマピースボランティア」事業	広島平和文化センター	1998-
	・「原爆遺跡フィールドワーク」	原爆遺跡保存運動懇談会	1990-
長崎 (3件)	・「青少年ピースボランティア」事業	長崎市被爆継承課平和学習係	2002-
	・「被爆体験記朗読事業(朗読会/朗読ボランティア育成・派遣)」	国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館	2011-
	・長崎市「語り継ぐ家族の被爆体験(家族証言)」推進事業」	長崎市被爆継承課平和学習係	2014-
沖縄 (4件)	・「ボランティア養成講座」	沖縄県平和祈念資料館	2004-2006
	・「子や孫に語り継ぐ平和のウミイ事業」	沖縄県平和祈念資料館	2012-2013
	・「次世代プロジェクト」	ひめゆり平和祈念資料館	2002-
	・「南風原平和ガイド養成講座」	南風原町	2007-

幸恵氏(講話時73歳)と、長崎からは初めて「交流証言者」の松野世菜氏(講話時19歳)をお呼びして講話を実施した。

(1) 広島市「被爆体験伝承者」養成

まず、広島市「被爆体験伝承者」養成について⁷、2012(平成24)年度より広島市市民局国際平和推進部平和推進課が中心となり、広島市「被爆体験伝承者」養成プロジェクトとして進められてきた事業である。本プロジェクトの目的は、以下の通りである。

被爆者の高齢化が進み、被爆体験を直接語り継ぐことができる方が減少している中、被爆者の被爆体験や平和への思いを次世代に確実に伝えるため、被爆体験証言者の被爆体験等を受け継ぎ、それを伝える「被爆体験伝承者」を養成する⁸。

資料1-2 広島市「被爆体験伝承者」応募者数と登録者数

年度	応募者数(人)	登録者数(人)
2012(平成24)	137	57
2013(平成25)	68	23
2014(平成26)	49	9
2015(平成27)	69	
2016(平成28)	47	
2017(平成29)	47	
	417	89

・広島市市民局国際平和推進部平和推進課山田智春氏からの聞き取り(2017年8月31日)による。

また、初年度からの応募者数と、2017年9月1日現在の広島文化センターにおける登録者数は以下の資料1-2の通りである。

現在、広島市「被爆体験伝承者」としての登録者は89名で、応募は、今後も継続する予定である。

(2) 長崎市「家族証言者」・「交流証言者」養成

一方、長崎市「家族証言者」と「交流証言者」養成は、2014(平成26)年度より長崎市被爆継承課平和学習係が中心となり、長崎市「語り継ぐ家族の被爆体験(家族証言)」推進事業⁹として進められてきた事業である。この事業の「概要」は、以下のように説明されている。

被爆者が高齢化し被爆体験を継承する機会が少なくなっている中で、被爆を経験していない世代が被爆体験を語り継ぐ「家族・交流証言者」を募集する。さらに継承を望む被爆者(家族・交流証言者に自身の体験を託したいかた)の募集も行い、被爆の実相の次世代への継承を推進する¹⁰。

事業開始当初は、「家族証言」を語る「家族証言者」の募集として開始されたが、昨年度から「交流証言者」を加え、「語り継ぐ被爆体験(家族・交流証言)推進事業」に変わった。「家族証言者」とは、「被爆者の子、孫等の家族、及び被爆者と親戚関係にある者」である。また「交流証言者」は、「同居や団体活動などにより被爆者との密接な交流経験を有する者」または「被爆者と関わりはないが、体験を継承する意志の強い者」である¹¹。

資料1-3 長崎市「交流証言者」2016年度(2016年8月22日現在)・2017年度(2017年9月13日現在)研修者内訳

	2016年度	2017年度
登録者数	17人	18人
平均年齢	45歳	36歳
最高齢	74歳	68歳
最年少	17歳	12歳
年齢階層		
10代	2人(11.8%)	7人(38.9%)
20代	2人(11.8%)	6人(33.3%)
30代	3人(17.6%)	0人
40代	2人(11.8%)	2人(11.1%)
50代	4人(23.5%)	1人(5.6%)
60代	3人(17.6%)	2人(11.1%)
70代	1人(5.9%)	0人
性別		
男性	3人(17.6%)	3人(16.7%)
女性	14人(82.4%)	15人(83.3%)
住所地		
長崎市内	13人(76.5%)	11人(61.1%)
長崎市外の県内	2人(11.8%) 諫早市、長与町	7人(38.9%)
県外	2人(11.8%) 名古屋市、大分市	0人

・長崎市被爆継承課平和学習係平山莉映氏提供資料(2016.5.2, 2017.9.13)により作成。

・2016年度の年齢は、応募締め切り時(2016年6月30日)年齢

資料 I-3 の通り、昨年の「交流証言者」の研修者は 17 名、今年度は 18 人である。

今年度の研修者の年齢について、平均年齢はちょうど 36 歳で、最少年齢は 12 歳¹²、最高年齢は 68 歳であった。昨年の 45 歳と比較すると 9 歳も若返っている。最も多い年代は 10 歳代で 7 人 (38.9%) で次には 20 歳代が 6 人 (33.3%) と続いている。この 10 歳代 20 歳代で全体の 7 割以上を占めたのは注目すべき点である¹³。

次に性別では、今年度の場合、男性 3 人 (16.7%)、女性 15 人 (83.3%) で女性が 8 割以上を占めた。

次に申し込みの所在地では、やはり長崎市内の方が 11 人 (61.1%) で多くを占める。長崎市外の方は 7 人 (38.9%) で、昨年より増加している。

また、現在 (2017 年 9 月 12 日) の「家族証言者」と「交流証言者」の講話可能者の内訳は、資料 I-4 の通りで「家族証言者」は 10 名、「交流証言者」は 5 名である。

講話可能者の年齢について、「家族証言者」平均年齢は 56 歳で、最少年齢は 29 歳、最高年齢は 73 歳、一方の「交流証言者」の平均年齢は 55 歳で、最少年齢は 19 歳¹⁴、最高年齢は 75 歳であった。

次に性別では、「家族証言者」は男性 2 人 (20.0%)、女性 8 人 (80.0%) で女性が 8 割を占める。一方「交流証言者」は 5 人全てが女性である。

次に申し込みの所在地では、「家族証言者」は長崎市内の方が 7 人 (70.0%) であるが、「交流証言者」では全て長崎市内の方である。

資料 I-4 長崎市「家族証言者」「交流証言者」講話可能者内訳 (2017年9月13日現在)

区分		家族証言者	交流証言者
登録者数		10人	5人
平均年齢		56歳	55歳
最高齢		73歳	75歳
最年少		29歳	19歳
年齢階層	10代	0人	1人(20.0%)
	20代	1人(10.0%)	0人
	30代	0人	0人
	40代	1人(10.0%)	1人(20.0%)
	50代	4人(40.0%)	0人
	60代	3人(30.0%)	1人(20.0%)
	70代	1人(10.0%)	2人(40.0%)
性別	男性	2人(20.0%)	0人
	女性	8人(80.0%)	5人(100%)
住所地	長崎市内	7人(70.0%)	5人(100%)
	長崎市外の県内	2人(20.0%)	0人
	県外	1人(10.0%)	0人

・長崎市被爆継承平和学習係平山莉映氏提供資料(2017.9.13)により作成。

3. 講話の実際 (広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「交流証言者」講話)

(1) 話の日程と講話者の略歴

本年も、7月28日(金)に講話を実施した。主な日

程は以下の通りである。講話時間は、それぞれご本人と相談し、藤井氏は1時間、松野氏は40分でお願ひした。

14:20 ~ 14:45 受付

14:45 ~ 15:00 基調報告

(秋田大学教育文化学部教授 外池 智)

「広島市『被爆体験伝承者』・長崎市『交流証言者』講話—戦争体験『語り』の継承—」

15:00 ~ 16:00

広島市「被爆体験伝承者」講話

(藤井幸恵氏)

16:00 ~ 16:10 休憩

16:10 ~ 16:40

長崎市「交流証言者」講話(松野世菜氏)

16:40 ~ 17:10 質疑応答

講話実施の順に、まず広島市「被爆体験伝承者」講話の藤井幸恵氏の略歴について取り上げる。藤井氏は1942(昭和17)年生。3才から広島で生活し、小中学校で34年間教職に就いた。1998(平成6)年からヒロシマ・ピース・ボランティアに参加しており、第1期生である。その後、広島平和記念館平和学習講座講師も務めている。そして、高岡氏や榎原氏と同様に広島市「被爆体験伝承者」第1期生である。正確な講話数は不明であるが、秋田大学での講話は30回目を超えるものである。

次に、長崎市「交流証言者」講話の松野世菜氏の略歴について取り上げる。松野氏は、1998(平成6)年長崎市生。生誕地は爆心地のすぐ近くであり、小学校は昨年度本研究で取り上げた山里小学校であった¹⁵。現在は長崎純心大学1年生。高校3年生の時に「交流証言者」に応募し、今年6月に母校の高校でデビューした。秋田大学での講話は、6月の母校での講話に続き2回目の講話になる。



広島市「被爆体験伝承者」藤井幸恵氏



長崎市「交流証言者」松野世菜氏

(2) 講話の構成と内容

実施した講話のお二人のプロットは、以下の資料I-5、資料I-6の通りである。

資料I-5 藤井幸恵氏による広島市「被爆体験伝承者」講話(46分51秒, 12,444文字)

- | |
|--|
| <p>○自己紹介(2分39秒(5.7%), 891文字(7.2%))</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 広島市の原爆被害(13分23秒(28.6%), 3,641文字(29.3%)) 2. 森田さんと2年生の被害体験(28分38秒(61.1%), 7,381文字(59.3%)) 3. 被爆者：ヒロシマの願い(2分21秒(5.0%), 531文字(4.3%)) |
|--|

・1～3のタイトルは、藤井幸恵氏講話時使用のパワーポイントから引用。「○自己紹介」は文字起こしから追加。

資料I-6 松野世菜氏による長崎市「交流証言者」講話(36分45秒, 8,969文字)

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 「交流証言者」を始めた動機(9分55秒(27.0%), 1,140文字(12.7%)) 2. 長崎市への原爆投下とその被害(2分45秒(7.5%), 777文字(8.7%)) 3. 山脇佳朗さんの被爆体験(17分20秒(47.2%), 5,081文字(56.7%)) 4. 平和とは?(6分45秒(18.4%), 1,971文字(22.0%)) |
|--|

・松野世菜氏講話時使用のパワーポイント及び資料I-8の内容から筆者作成。

実際の講話の内容は、資料I-7、資料I-8の通りである。講話から質疑応答まで、全文掲載してある。

内容の構成は、当然ながらお二人とも違いはあるが、その中核となる部分については、以下の3点と共通している。

- ・被爆の実相
- ・被爆体験の「語り」
- ・平和への願い

これは、一昨年実施した高岡昌裕氏、昨年実施した榎原泰一氏の広島市「被爆体験伝承者」講話、さらに昨年

実施した佐藤直子氏の長崎市「家族証言者」講話においても同様の構成であった。被爆体験の伝承講話としては、スタンダードな構成といえる。

次に、文字起こしをした資料I-7、資料I-8の分析から指摘したい。藤井氏の講話は、文字起こし分の時間で46分51秒、文字数だと12,444文字であった。一方の松野氏の講話は、文字起こし分の時間で36分45秒、文字数だと8,969文字であった。注目したいのは、やはり「語り」の継承部分である。藤井氏の場合は、「2. 森田さんと2年生の被害体験」の部分で、時間では28分38秒(61.1%)、文字数では7,381文字(59.3%)であった。今回の「被爆体験伝承者」講和では、肝心の継承部分の「語り」は、時間も字数も6割を占めており、中心的な「語り」となっていたことが分かる。一方の松野氏の場合は、「3. 山脇佳朗さんの被爆体験」の部分で、時間で17分20秒(47.2%)、文字数では5,081文字(56.7%)で¹⁶、やはり全体の半分を占め、中心的な「語り」となっていたことが分かる。

(3) 参加者の感想

参加者は、秋田大学教育文化学部の社会科教育の免許取得科目を受講している学生・院生29名、一般参加者2名、その他、ABS秋田放送のマスコミ関係者であった。

聴講したアンケートとして2点、「○実際にそれぞれの『語り』を聞いた感想・意見等をお聞かせください。(1)広島市『被爆体験伝承者』講話、(2)長崎市『交流証言者』講話」を記入してもらっている(資料I-9参照)。こうしたアンケートの中から、主だった感想・意見を取り上げてみたい。

まず、広島市「被爆体験伝承者」の藤井幸恵氏の講話への感想・意見を取り上げる。藤井氏は、前述した様に、小・中での教職経験が34年あり、人前で話す事には十分慣れている。加えて、伝承者としての「語り」も今回までで30回以上行っており、一昨年の高岡氏(秋田大学での講和がデビューで初回)、昨年の中野氏(17回目)と比較しても十分な経験を有している。そうした語り手としてベテランの藤井氏の「語り」を聴講した学生達は、どのような感想・意見をもったのだろうか。ここでは、2点取り上げたい。

まず、1点目は非常に臨場感のある「語り」であったとの感想である。例えば、「藤井さんの語りのうまさに引き込まれました。臨場感があり説得力がありました」((1)-1)、「被爆体験をしていないということを感じさせない語りで、すごく熱意、迫力が感じられた」((1)-17)等である。こうした感想は、提出された感想全26件の内8件を占める。こうした臨場感のある「語り」は、当然藤井氏自身の「語り」の経験に裏打ちされている事

と藤井氏の「語り」の上手さにあるが、それ以外にも藤井氏の「語り」が情感溢れる「語り」であったこと¹⁷、またリアルな表現力溢れる「語り」であったこと¹⁸もよる。そして、さらに加えておきたいのは、こうした臨場感のある「語り」を可能にしているのは、“紙芝居的語り”が成功しているからである点である。今年藤井氏の「語り」をお聞きして、発表者が真っ先に感じたことは、昨年長崎市「家族証言者」の佐藤直子氏の「語り」との類似であった。昨年の佐藤氏の「語り」では、肝心の被爆体験の「語り」の部分を紙芝居を使いながら実施していた。実施前は、実際どうなるのか非常に興味があったが、結果としては大変好評であった¹⁹。今年藤井氏の「語り」も基本的には同様で、紙芝居ではなくパワーポイントを使いつつも、原体験者である森田節子さんの被爆体験に合わせた絵や写真に対応した「語り」があり、それが次々に展開されていく構成であった。特に、被爆体験伝承部分に当たる「2. 森田さんと2年生の被害体験」の部分では、スライド全61枚中30枚のほぼ半数が使用された。その内訳は絵画14枚、地図5枚、文字5枚、写真4枚、地図写真複合1枚で、絵画がほぼ半数を占めていた。絵画が多く使用された事も、“紙芝居的語り”を印象付けていたと考えられる。加えて、体験部分の「語り」では、「せっちゃんか」と主語を置き、まるで物語の主人公の様に語っていた。実際、講和後にご本人に確認したところ、驚くべきことにまさにその通りであるという。ご本人が意識しているのは、「紙芝居である」と明言していた²⁰。この点は、「被爆体験伝承者」の「語り」の進化として後に詳述したい。

2点目は、昨年の榎原氏と同様に、パワーポイントを活用した視聴覚資料に対する肯定的意見である。例えば、「実際の原爆が投下された広島市の状況のイラストや被爆された方の写真を見ることで、当時の様子がより切実に伝わってきました」((1)-6)、「リトルボーイの実寸大の写真や多数の画像資料から、原爆のすさまじさが強く感じ取ることができた」((1)-10)等である。一昨年お呼びした高岡昌裕氏の場合、「語り」へのこだわりがあり、あえて視聴覚資料は控えており、実際の講話時に使用した資料は被爆直後の絵を中心とした4枚ほどだった。それに対して、昨年の榎原氏の講話では使用したパワーポイントの枚数は91枚（うち写真や絵等視聴覚資料は85枚）にも上った。そして、今年藤井氏は、実際使用した枚数は61枚であった。さらに、壇上に実物大のリトルボーイの写真も掲示していた。こうした、「語り」を補う効果的な視聴覚資料の活用が、「当時の様子がより切実に」伝わる結果となった。この事は、1点目の“紙芝居的語り”とも深く関連している。

次に、長崎市「交流証言者」の松野世菜氏を取り上げ

たい。長崎では、前述したように「家族証言者」を先行して募集したが2年で頭打ちになり、昨年度から本格的に「交流証言者」を募集した。その意味で、広島市の「被爆体験伝承者」と同じケースでの「語り」の継承となった。昨年は、佐藤直子氏の「家族証言者」であったが、今年度は初めて「交流証言者」をお呼びした。しかも、聴講する学生達より若い語り部である。実際に「語り」を聴講した学生達は、どの様な感想・意見をもったのだろうか。ここでは、3点取り上げたい。

まず1点目は、やはり「若さ」にも拘らず、こうした活動に取り組んでいる事への肯定的意見である。例えば、「私より年下の子が講話してくれるということで楽しみにしていましたが、予想以上に感動しました。年が近い方の言葉だからこそ、感じる言葉の重みだとか、松野さんが今まで、被爆体験者の方から聞いて、感じて、伝えていきたいと思った熱い思いだとかが伝わってきて、遠い場所だから関係ないという考えはなくなりました」((2)-12)、「自分より若い人が、こう言った活動をされているのを知り、驚いたと同時に、すごいと尊敬します。何よりも、長崎の被爆体験について伝えたいという熱意が伝わってきました」((2)-13)等である。こうした感想・意見は、全26件中10件(38.5%)に及ぶ。自分達より若い世代が、実際にこうした活動に取り組んでいる事への素直な感想であろう。

2点目は、「平和とは何か？」について考えさせられたとの意見である。例えば、「『平和とは？』という質問が非常に印象的で私も教員になった際に子ども達に考えさせたい」((2)-5)、「平和とは何か？という命題は非常に深く、最後に聴者に問われたことで、自分にとっての平和は何かを考えさせられました」((2)-11)、「最後の質問でされた『平和とは？』という問いについて、まだまだ考えていきたいと思います」((2)-12)等である。全体では7件の意見があった。これは、やはり構成上「6. 平和とは？」が結びになっている事の影響であろう。時間としては6分45秒(18.4%)、字数は1,971文字(22.0%)で、全体の2割ほどの場面であった。また、語り部自身の問題として、学生達に真摯に投げかけた事も印象に残ったのであろう。本質的な問いである。

最後は、いわば“平和学習格差”に関する意見である。例えば、「松野さんのお話を聞いて、長崎では学校教育の中で被爆者のお話を聞く機会があることに驚いた。戦争教育には地域差があることを実感した」((2)-16)、「戦争についての認知度が県によって違うのは県によって平和に対する意識が違うのかなと思ってしまった」((2)-17)、「松野さんのお話の中で、長崎の小学校で『平和学習』が時間割の中にあるということに驚きました。私がこれまで受けた授業ではあまり戦争について深く学習

することはなく、原爆についても、投下されたという事実のみが扱われてきました」(2)-24)等である。こうした意見は、全体で5件あった。これは、講話の冒頭で「1.『交流証言者』を始めた動機」を語った事への印象が大きかった事によろう。加えて、なかなか他県での平和学習の実態に触れる事の少ない秋田の学生達の率直な驚きもあろう。松野氏は、幼い頃から平和について学ぶ機会があり、そうした学習環境を当然だと思っていた。しかし、中学生になって他県の方に原爆投下の日時を問うアンケートの機会があり、自身の平和学習体験が当然ではなかった事に衝撃を受けた。そして、この体験が「交流証言者」となる大きな動機となっていた。同じように、聴講した学生達も自身の平和学習体験を振り返っての率直な感想である。

この他にも、お二人の話を聞いて自分自身でも何か行動したい、特に教員養成系の学生であるので、今後教育の場で活かしていきたいとの意見も6件あった²¹⁾。

3. 小括

以上、昨年度に引き続き2012(平成24)年度から取り組まれている広島市「被爆体験伝承者」と2014(平成26)年度から取り組まれている長崎市「家族証言者」・「交流証言者」を取り上げてきた。「語り」の内容構成や方法、実際に視聴した学生達の感想などの視点から検討してきた。

最後に、“紙芝居的語り”と「語り」の進化・語り部の成長について述べたい²²⁾。まず、前者について、前述したように今年の藤井氏の「語り」は、“紙芝居的語り”とも言えるものであった。さらに加えたいのは、実は松野氏の「語り」も同様に“紙芝居的語り”であった事である。松野氏の「語り」も、基本的にパワーポイントを使い、総数28枚のスライドを活用していた。特に「交流証言者」としての伝承の「語り」部分では、原体験者である山脇佳朗さんの被爆体験に合わせた絵や写真の場面場面に合わせた「語り」があり、それが次々に展開されていく構成であった²³⁾。これは、伝承者講話が実施されるにしたがって「語り」が工夫され、一つの「型」が確立しつつあることを意味している。一昨年の高岡昌裕氏は、あまり図像資料を使用しない、まさに「語り」を中心とした「語り」であった。それに対して昨年の榎原泰一氏は、パワーポイントで多くの図像資料を使っていたが、実際の被爆体験の継承部分の「語り」は時間も文字数も2割程で、その他は広島への原爆投下や、被爆の実相など、いわゆる「事実的語り²⁴⁾」「現象的語り²⁵⁾」などの説明的な「語り」が中心であった。また、昨年の長崎市「家族証言者」佐藤直子氏の「語り」に至っては、実際に紙芝居そのものを活用した「語り」であった。そ

して、今年の藤井氏と松野氏は、やはりパワーポイントで多くの図像資料を使用しつつ、被爆体験の継承部分の「語り」は藤井氏は6割以上、松野氏はほぼ半分を割り当て、場面に合わせた表情豊かな「語り」により、臨場感溢れる「語り」を実現していた。これは、伝承的「語り」の一つの到達点であり、“紙芝居的語り”と言えるものである。

また、昨年度の発表では、「語り」の継承の課題として、「語り」の正当性の確保と「語り」の「硬化」の問題を指摘した²⁶⁾。すなわち、広島市「被爆体験伝承者」や長崎市「交流証言者」の様に、全くの第三者が「語り」を継承している場合、その方達の「語り」が「正しい語り」であると誰が証明し、それをどのように維持していくのか、そしてその正当性にこだわるあまり、逆に「語り」を硬化させてしまう問題である。しかし、そうした「語り」の正当性の確保と「語り」の「硬化」の問題に対して、こうした“紙芝居的語り”は一定の方策と成り得ている。ここでは、図像資料とそれに対応する“シナリオ”が用意され、場面に対応する一定の「語り」が確保される。また、語り部自身の臨場的、表情豊かな「感性的語り²⁷⁾」を可能にしている。今後の継承的「語り」の在り方として示唆的な手法である。

さらに、これは「語り」の進化であり、語り部の成長である事も指摘おきたい。例えば、広島市「被爆体験伝承者」の「語り」、すなわち高岡氏、榎原氏、そして藤井氏それぞれの「語り」の違いは、それぞれの語り部の考え方や個性、そして経験にもよろう。しかし、藤井氏の「語り」自体も3年前の養成プロジェクト修了時から回数を重ね、森田さんの被爆体験の根幹部分の変容はないものの、「語り」構成は変えていると言う。例えば、当初はなるべく森田さんのエピソードを盛り込もうとしていた内容を、「12歳の少女の話」に焦点化しているのである²⁸⁾。こうした、いわば「語り」の進化は、例えばひめゆり平和祈念資料館の第1号「説明員」である仲田明子氏や²⁹⁾、「沖縄県平和祈念資料館友の会」の安田國重氏³⁰⁾からも伺っている。

語り部達は、日々「これでよいのか」と苦悩し、自問自答しながら伝承的「語り」を展開している。そうした真摯な日々の積み重ねがこうした「語り」の進化と語り部の成長をもたらしているのである。

1 2009-2011年度科学研究費補助金基盤研究(C)「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」。

2 2012-2014年度科学研究費補助金基盤研究(C)「戦争体験『語り』の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用」。

3 2015-2017年度科学研究費補助金基盤研究(C)「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の構築」。

4 「次世代の平和教育」については、2014（平成26）年度日本社会科教育学会第64回全国研究大会（静岡大会）自由研究発表「教員研修における平和教育—広島市、長崎市、那覇市の取り組みを事例として—」、また論文としても同名のタイトルで秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学』第70集、（秋田大学教育文化学部、2015年3月）、1-18頁にまとめている。その特色として、以下3点を指摘した。

(1) 継承的アーカイブの活用

(2) 戦後の平和希求活動への着眼

(3) 目的の平和教育から方法的平和教育へ

5 高岡氏の講話については、拙著「戦争体験『語り』の継承とアーカイブ(3) —広島「被爆体験伝承者」のデビュー—」秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学』第71集、（秋田大学教育文化学部、2016年）、1-22頁を参照。

6 橋原氏、佐藤氏の講話については、拙著「戦争体験『語り』の継承とアーカイブ(4) —長崎市「語り継ぐ被爆体験(家族・交流証言)」推進事業」を事例として—」秋田大学教育文化学部編集委員会編『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学』第72集、（秋田大学教育文化学部、2017年）、57-91頁を参照。

7 広島市「被爆体験伝承者」養成プログラムに関しては、拙著「戦争体験『語り』の継承プログラムに関する研究—広島、長崎の取り組みを事例として—」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要編集委員会編『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第35号、（秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター、2013年）、1-13頁、前掲書5、前掲書6、拙著『2012-2014年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 戦争体験「語り」の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用』(2015年、暁印刷)を参照。

8 広島市HP「被爆体験伝承者募集」より。

9 長崎市「語り継ぐ家族の被爆体験(家族証言)」推進事業については、前掲註6参照。

10 長崎市教育委員会HP (<http://www.city.nagasaki.lg.jp/kosodate/520000/523000/p001708.html>)より引用。2016年5月27日閲覧

11 長崎市「語り継ぐ被爆体験(家族・交流証言)」推進事業実施要項(長崎市被爆継承課、2014年)「3 対象者の要件」による。

12 現在長崎市内の中学1年生の女子である。高校生平和大使を目指している。長崎市被爆継承課平和学習係平山莉映氏からの提供資料と聞き取り(2017年9月13日)による。

13 前掲註12の平山氏によると、長崎市ピース・ボランティア参加者が、応募してきたことも影響しているのではとの事であった。

14 今年度秋田大学にお呼びした松野世菜氏である。

15 本年7月28日に秋田大学で実施した「広島市『被爆体験伝承者』・『長崎市交流証言者』講話」時に秋田にお越しいただいた際の松野世菜氏からの聞き取り(7月28日)による。

16 松野氏の、この部分の時間と字数のギャップは、時間に対して「語り」の情報量が多かったことを示している。

17 例えば、「原爆を落とされた後の状況が、一人の女性の体験を通して伝わってきました。声の抑揚に感情が乗せられて聴者にもよく伝わりました」((1)-11)、「藤井さんは伝承者であるが、まるで被爆者のような話しぶりだと感じた。それ

だけ感情がこもっているのだと思った」((1)-16)等の感想である。

18 例えば、「『水がほしい』『ねんどのような胃液』というようなリアルな表現がその時の状況を想像させました」((1)-18)、「8月6日に落とされた原子爆弾がどのように人々に被害を与えたのかが、生々しく語られていて、自分たちがあの8月6日を追体験しているかのようでした」((1)-21)等の感想である。

19 前掲註6参照。

20 本年7月28日に秋田大学で実施した「広島市『被爆体験伝承者』・『長崎市交流証言者』講話」時に秋田にお越しいただいた際(7月27-29日)の藤井幸恵氏からの聞き取りによる。

21 「私も松野さんのように若い世代として、授業などを通して、次の世代である子どもたちに平和について考える大切さを伝えていきたいです」((1)-6)、「将来子どもたちに戦争について教えていくため、自分自身がまず原爆について深く学び、理解していかなければならないと考えを改めました」((1)-24)等である。

22 例えば、広島市「被爆体験伝承者」の「語り」は、第1期の修了生が出てから3年連続で拝聴している。すなわち、経年的に聴講しているが故の指摘である。

23 特に、被爆体験伝承部分に当たる「3. 山脇佳朗さんの被爆体験」の部分では、スライド全28枚中13枚のほぼ半数が使用された。その内訳は写真8枚、地図3枚、絵画1枚、文字1枚で、写真が6割以上を占めていた。

24 「①事實的『語り』」は、語られるストーリーの主体、場、日時、そしてその時の戦局や状況といった客観的状況に関する説明的な「語り」である。前掲註7報告書参照。

25 「②現象的『語り』」は、体験者のおかれた状況下で何が起きたのかを現象として語るものである。前掲註7報告書参照。

26 前掲註6参照。

27 「③感性的『語り』」は、臭いや肌触りといった感触等、まさに体験したものが感じた情報であり、またその時の思いや気持ち、願いとといった内面の心情に関する「語り」である。前掲註7報告書参照。

28 これについて、講和後の質疑応答で、藤井氏は以下の様に述べている。「だから、森田さんの話をするとき、そういう話も入れたかったし、お父さんが軍人のバリバリと治療するところであるとか、中心を歩いて、歩いて、森田さんを探し回るそのときに、中学生、小学生の死体を1人1人、ずるずるの遺体を起こしながらやる。そういう話も、初めのうちは入れてたんですけども、段々私の話が変わって行って、いや、もうあの当時の12才の少女の話にしておもうと思って、そういう話になっていったですね。だから私の中でも変わってるし、森田さんから受け継いだものすべてではないんです。そういうものがあるわけです。」資料I-8の質疑応答部参照。また、前掲註20の聞き取りからも確認している。

29 2013(平成25)年9月に伺ったひめゆり平和祈念資料館「説明員」の仲田晃子氏からのインタビューによる。さらに2017年8月3日に再び仲田氏からも聞き取りを実施し、再構成する「語り」について伺っている。前掲註7報告書参照。

30 2013(平成25)年9月に伺った「友の会」会長の安田國重氏、同会事務局長の比嘉涼子氏、同会副会長の久保田曉氏からのインタビューによる。前掲註7報告書参照。

資料1-7

広島市「被爆体験伝承者」講和 藤井幸恵氏（2017.7.28）文字起こし

【基調報告】（10分28秒 2,748文字）

外池：じゃあ、すみません。ちょっと早いんですが、始めさせていただきたいと思います。広島市被爆体験者伝承者、長崎市交流証言者講話ということで、今から2年前ですか、初めて広島市の被爆体験伝承者、高岡さんという方をお呼びして、去年は長崎から交流証明者の方もお呼びして、今年も広島から、被爆体験伝承者の藤井さん、そして長崎からは、交流証言者という形で、松野さんもお越しいただきました。企画は、私どもの研究で、進めてるものの一環です。今日は皆さん本当お忙しい中、2時間ちょっとくらいになるかと思うんですけど、どうぞよろしくお願ひいたします。声も、夏風邪で、こんなガラガラになっちゃって、でも私のほうの話は少しなんで勘弁してください。

それで、簡単に、藤井幸恵さん、1942年のお生まれです。3歳から広島で生活されてて、その後、小中学校で教職に就いておられました。その後の、1998年から広島ピースボランティア第一期に参加、そして、その後広島平和記念館、平和学習講師、広島平和記念館平和学習講座の講師、そして広島市の被爆体験伝承者、第一期生ということになります。もうひと方が松野さん、松野世菜さん、1998年生まれ、長崎市出身です。現在は長崎純心大学1年生、高校3年生の時に、交流証言者に応募して、今年6月に母校でデビューしたということです。

それで、先の大戦は、って言われますけど、満州事変から1945年、もうすぐやってくる8月15日、足かけ15年間にまたがる戦争ってことですよ。とりわけ最後の1945年の時は3月から終戦迎えるまでに、目白押しに大きな事変があった。でも、つい先々週、3年生の諸君が授業してくれましたけれど、6月30日に花岡事件、今週の火曜日ですか、また3年生の諸君なんかの実施で参加しましたけど、8月14日の土崎空襲、そういったことが行われた。

それで、このへんは秋田県の戦没者から見ると3万4千人、秋田市の戦没者、4千457人、人口ピラミッドを見ると、戦前生まれの人、ちょっと古いデータですけど、全人口の18.2パーセントと、戦争体験を語れるっていう年齢を仮に10歳以上とすると、もう、もはや7.3パーセントしか日本国内にはいない。じゃあ秋田県どうなのか、秋田県は戦前生まれの人は、少子高齢化といわれるくらいで、ちょっとパーセント高いですよ。しても、10歳以上を考えると、やっぱり10パーセントを切っちゃってると。確実に国民全体が戦争体験を持たないっていう、その時期がやってくるということになります。その時、教育は、学校は、社会科は、歴史教育は、何をするのかという時がやってくるということですね。

そういった戦争体験の記憶とか記録とか、最近、やたら違う意味でこの言葉飛び交ってますけど、その検証をどうするのかと。一つの戦略はモノを活用する。これは戦争遺跡。今年2月に改定されましたけど、被爆倉庫とか。有名なのは広島原爆ドームですとか。あるいは媒体、その証言とか、語りとかそういったものを紙媒体、映像媒体、音声媒体で記録すると。ところが画期的な取り組みで、ヒトそのものに渡しちゃおうと。そういう挑戦的で、画期的な取り組みが広島から始まって、やがて長崎、そして少しずつ全国へと広がりつつあるんですね。

とりわけ画期的なのが語り部の養成ですね。これは、伝承者そのものを養成しちゃう。これが今日来ていただいている藤井さんとか、あるいは松野さんになります。

朗読ボランティア、これは朗読という、最初から物語形式になっているものを、例えば吉永小百合さんとか、毎年やってみるような語りとしてやってみる。長崎では、昨年お呼びした佐藤直子さんなんかは、家族に証言の方お持ちで、その親族が語りを継承してきた。ところが、長崎の場合はそれが頭打ちになった。それで広島と同じように、全然血縁でも何でもない、そういう方を語りの継承者にしよう。それを特別に家族証言者と分けて、交流証言者というふうにした、ということですね。ヒトへの継承。今いったように語り部の継承。ちょっとさっきと順番違いますけど。

その他に有形化すれば、例えば広島とか長崎とか沖縄なんかで、平和ボランティア、ピースボランティアって形でやって、語りをする人たちはボランティア活動しながら勉強して語っていくとか、あるいは、ある特定の戦争遺跡、例えば広島原爆ドームですとか、あるいは沖縄の平和の礎とか、そういった史跡と語りを複合させて、それで語りをしていくパターン。

あるいは、沖縄にひめゆり記念館がありますが、あそこは当時師範学校とか高等女学校で、ある意味強制的に看護師、看護活動させられた人たちが、たくさん亡くなった。その後にひめゆり記念館というところで、立ち上げて語るわけですけど、彼女たちは語りだけじゃなくて、施設そのものの運営とか、あるいは記録の検証とか、そういうことまでやるんですよ。ただの語り部じゃない。そういう運営や経営までも含めた後継者を育てる、そういうパターンなんかもあるということです。

今日の場合は、特にまず藤井さんのパターンは、2012年から広島市市民局の被爆体験継承者養成プロジェクトで始まって、これは3年間、こういう1年目は、実際の被爆体験を持つ方々の語りを丸1年かけて、23人いて、その方から語りをずっと聞いていく。2年目にはマッチングって言って、その中から私、この人の語りを継承していく、というんで、決まった人たちから濃厚な関係性を作って行って。3年目には1万字といわれてるような証言の記録書いて、それでご本人、そして市民局、両方からオーケー貰った形で初めて伝承者として認定される。すなわち、藤井さんが1期生ですけど、伝承者の方々は3年間かけたプロジェクトで育てられた方々ってことになります。

最初の年はちょっと大人数とか、これは実際に私が広島に行って、養成してる途中を映したんですけど、これ全国のアナウンサーの方が来て、喋り方を教えてるとこなんですね。この辺飛ばしながら。この方、去年来ていただいた植原さんですね。

松野さんのパターン。これはさっきちょっと言いましたけど、長崎のパターンで、長崎は2014年から。ここが違うのは、家族証言者っていう形で最初やりだしたってことですね。昨年来ていただいた佐藤直子さんです。佐藤さんはお父さんの形見を引き継いだ。ユニークだったのは、紙芝居っていう形で、やったということですね。

その他記録は沢山あるんですが、今日はそれぞれ第1期生の藤井さん、そして長崎の交流証言者で、初めての語り、今日は語りとしては2回目なんですけど、こちらお呼びするのは初めてということで、松野さんということでやっていただきます。じゃあ、どうぞよろしくお願いします。すみません、声ガラガラで。

【広島市「被爆体験伝承者」講和 藤井幸恵氏】

○自己紹介（2分39秒，891文字）

藤井：ではちょっと準備していただいている間に、どうぞよろしくお願いいたします。藤井幸恵と申します。

このハマナスの花は、実は引揚記念館で咲いてしていたものを、持ってきたものなんです。昨日私は土崎で短時間だったんですけど、行ってみました。するとですね、高校生が、駅で会った高校生が、ちょっと遠いですよ、連れて行ってあげましょうか、という素振りをされるんですね。さすがにそれはご遠慮したんですけども。乗せていただいたタクシーの運転手さんが、ここにあって教えてくださる。沢山あった。そしてタクシーのメーターをつけないで、あそこも行きましょう、ここも行きましょうって、話してくださる。私は残念ながら秋田弁が半分しか分からなかったものですから、理解ができないところもあったんですけども、ネットでちょっと調べてきましたので、もう短時間にして料金を安く、かなりのところを見せていただきました。

私はですね、広島に原爆が落ちて、長崎に原爆が落ちて、終戦が来たとは思っていませんでした。もちろん8月14日に空襲があったというのは頭の中で知ってたんですね。けれども、昨日行って、外池先生が、私は被爆者でないのに、被爆体験を伝承できないんじゃないかという気持ちが常にあるのを思います。私も思います。それを道々思いながら過ごしているような気がします。

前置きが長くなりました。浜ナシ山へは、昨日行ってまいりましたということで、ご報告させていただきました。

藤井幸恵と申します。よろしくお願いいたします。私は森田節子さんという被爆者の伝承をさせていただきます。

この写真は、実は森田さんが60代くらいの、お若い頃の写真で、マツダの下請け工場を、ご主人とバリバリとやっていた頃のお写真です。藤井さん、この写真を使ってね、というお気に入りの写真です。森田さんご夫婦は、ご主人も被爆者でとうとう子供さんには恵まれませんでした。案外そういう方が被爆者には多いんですよ。恵まれませんでした。若い方々に囲まれて、良い製品を作ろうと一生懸命生きていらっしゃった、森田さんのお写真です。現在森田さんは体調を崩して休んでいらっしゃいます。

1. 広島原爆の被害（13分23秒，3,641文字）

今日は初めに原爆の被害の特徴について、ちょっとくどいと思います、皆さんには。よく知ってる方が多いと思いますが、お話をして、次に森田さんと一級上の2年生、今でいう中学1年生、2年生のお話をさせていただきます。そして最後に、人類はまた核兵器を使うという過ちを繰り返してはならないという、被爆者そして広島への願いをまとめてみたいと思います。

初めに広島原爆の被害についてお話します。広島は上流から一本の大きな川が流れてきて、7本の川に分かれていました。その川が運んできた、砂でできた、三角形の広がって平らな地形でした。原爆の投下目標として、この地形が選ばれました。投下目標は相生橋でした。

地図には、爆心地から500メートルごとに円が描かれて、原爆の被害が町の中心に大きく広がっている様子がわかります。この被害を表す色の付いているところは、半径約2キロメートル。昔も今も、広島が一番賑やかなところ、中心部を狙って落とされたことが分かります。8月6日の朝も、沢山の人がこの中心部にいました。

これが原爆、リトルボーイ、広島に落とされた原爆です。長崎はこれよりやや大きいのです。やや大きいので、エネルギーも大きいわけです。リトルボーイと呼ばれ、最新鋭のB29、エノラゲイによって、広島の上空1万メートルに運ばれました。そして43秒後、この形がまだ上空にある間に、この中で約50キログラム、このぐらいです、の、ウラン235が核分裂をし、有効に核分裂をしたのはゴルフボールくらいでした。100万分の1秒の間に、この中で核分裂が終了をし、3秒であらゆるエネルギーが出て、10秒で広島が壊滅し、その後広島は大火災になりました。

ご存知のように、1945年8月6日、朝8時15分、原爆は相生橋をターゲットとして落とされ、たった300メートル離れた島病院の上空600メートルで炸裂しました。

これが現在の爆心地辺り、平和公園の上空から写したものです。平和公園、三角の部分に原爆死没者慰霊碑があり、相生橋、それから原爆ドーム、島病院があります。そして、ちょっとごめんなさい。下に、ちょっと見えませんが、実は平和大通りがあります。平和大通りというのは、中学1年生、2年生が動員をされていて、空き地を作る、建物疎開作業をしていたところで、沢山の子どもたちが被害になったところです。

放射線、熱線、爆風放射線、熱線、爆風。人類の経験したことのない、核分裂のエネルギーが広島を襲いました。人々は逃げる間もなく放射線を浴び、熱線に焼かれ、爆放射線を浴び、熱線に焼かれ、爆風に吹き飛ばされ、倒れた家の下敷きになりました。

即死した人即死した人、建物の下で生きながら焼かれた人。助けようとして助けられず、家族や友達の声を聞きながら、その場から逃げなければならなかった人もいました。

立ち上がれる人、まだ動ける人だけが、息も絶え絶えになりながら、炎に焼かれて渡れる橋を渡り、川に入り、郊外に、郊外に、家族の元に逃げ延びました。爆心地から3.5キロ離れていたところにいた人でも、夏のことですから、上着をきていなかった人は火傷をし、当時は木造の家が多かったのですが、木造の家は爆風でめちゃめちゃに壊れたりしました。被爆した人たちが、思い出したくない、できることなら忘れてしまいたい。あの日の光景を、辛い気持ちを乗り越えて描いた絵が広島市に4200枚残されています。

広島でどんなことがあったのか、未来に、世界に伝えていく絵です。いく絵です。竹やぶの下には、沢山の人が力尽きて横たわっています。

8月6日に写された写真があります。非常に有名な写真で、原爆といえばこの写真が報道されます。爆心地から2.2キロ離れた、鉄筋コンクリートの橋の上に逃げてきた人々です。原爆が炸裂して約3時間経ちました。爆心地の方向から煙が立ちあがっています。生きているか、死んでいるか分からない人が数人横たわっています。黒焦げになった赤ちゃんを抱いて、半狂乱になっている女の人が写っています。

建物疎開に動員されていた、中心部から逃げてきた中学生、女学生がやっとこの橋に辿り着いています。髪の毛が焼け焦げ、皮膚が垂れ下がり、履物がなくなり、足の裏はずるずるに焼けています。この写真を見て、これはあの日の私です、と言っている女の人がいます。この頭の、この耳の、この背中の、この男の子は、あの日、とうとう帰ってこなかった、自分の子供に違いないと言っていたお母さんがいました。

熱線のために、髪の毛も、人も、家も燃えるものに火がつき、この半径2キロメートルの中は、一日中、大火災になり、その後、強い黒い雨が降りました。土砂降りだったり、急にやんだり、寒くて震えた、という証言があるほど異常な降り方でした。これも、世界の原爆の威力のすさまじさを伝えてゆく写真です。

8月6日、アメリカ軍が撮影しました。このキノコ雲の下、広い範囲に黒い雨が降りました。

2008年の調査で、こんなに広い範囲で黒い雨が降ったと調査されています。この地図の中の青いところが、先ほどまでの旧広島市に相当する部分です。

熱線、爆風、大変なエネルギーを持った爆弾だったのですが、ご存じのように、この原爆の、他の爆弾にはない一番の特徴は、放射線です。放射線は、目に見えず、臭いもありません。人体の奥深くまで入り込み、人間の細胞に深刻な障害を起しました。爆心地にいた人が一番深刻で、爆心地からどのくらいの距離にいたか、どんな所にいたか、建物の外だったか、中だったか、建物はコンクリート造りか、木造かによって、受けた放射線の量が違って、その後の命、健康に大きく影響しました。

爆心地から1キロメートル以内で、遮る物のなかった人は、命にかかわる量の放射線を受け、ほとんどの人が数日のうちに亡くなりました。火傷や、大きな怪我がなくても、放射線を多くあびた人は、被爆直後から食欲がなく

なり、下痢が続き、熱が出る、毛が抜ける、血を吐く、鼻、口、耳、内臓など、あらゆるところから血が出て止まらなくなり、全身に紫色の出血斑が出て、うわごとを言い、苦しみ抜いて亡くなりました。生き残った被爆者を襲った、激しい急性障害の症状でした。

この21歳の兵士は、広島城近くの木造兵舎の中で被爆をし、火傷と怪我の治療を受けている内に、8月18日、発熱、髪の毛が抜け始め、9月の3日の深夜、意識不明になり、亡くなりました。実は、東北出身の方で、お名前も分かっています。

その日の朝、35万人の人がいたと推定されますが、1945年の終わりに、次々と14万人の人が亡くなりました。爆発のとき、巻き上げられた土や泥、すすなどが入った黒い雨には、強い放射能が含まれていました。

けがや、火傷をした人々は喉が渇いて苦しみ、雨水を求めて川、池の水を飲んだり、火傷や傷口を黒い雨に濡らしたりしました。原爆の直後に家族を探して、中心部を歩いたり、救援救護のために広島に後から入ってきた人々も、街に残った放射線の影響を受けました。

佐々木貞子さんのお話を皆さん、ご存知だと思います。原爆の子の像のモデルになった佐々木貞子さんは、2歳のとき、爆心地から1.6キロメートル離れたところで被爆をし、大きな火傷や怪我はありませんでした。逃げる途中、黒い雨にあたりました。そして、10年もたって、12歳の時に白血病で亡くなりました。1日も中学校に通うことができませんでした。

被爆して10年、20年、30年、そして72年。原爆の放射線は、今も癌などの病気を引き起こし、高齢になった被爆者を不安にして、苦しめています。原爆の放射線が長い年月の間に人間の体にどんな影響を起こすのか、十分な調査がされてきませんでした。そして今も研究、調査が続けられています。

世界にどのぐらいの核兵器があるのでしょうか。1945年、世界中を巻き込んだ戦争が終わる直前、広島と長崎で原爆が使われた時、世界は一旦、核兵器の怖さ、原爆の被害の酷さに本当に世界中が驚きました。しかしその後、各国はご存じのように核実験を繰り返し、一番多い時で8万発の核兵器があったと調査されています。今では9ヵ国が核兵器を持ち、約1万5千から1万6千の核兵器があると調査されています。種類も破壊力も、その他核兵器を取り巻くいろいろな状況も、広島と長崎で使われた原爆と比べられないほど、開発、研究、そして今も近代化が続けられています。

核兵器をなくそう、減らそうという国々、人々の願いにも関わらず、核兵器を持つ国々、そして日本は核兵器に依存する政策を続けています。私たちの身近には、核兵器が使われるかもしれないという不安が現実的に実際にあります。今こそ核兵器に対する一人一人の、私の認識、行動が重要な時代だと思います。

1945年、原爆が使われた広島と長崎で、どんなことがあったのか。私が、私達が、全人類が、核兵器の怖さを忘れないで、世界の人々に核兵器の怖さを知ってもらい、大きな声になることが、核兵器をなくす道の一つだと私は思います。

2. 森田さんと2年生の被爆体験 (28分38秒, 7,381文字)

これから、12才で核兵器の怖さを体験した森田節子さんのお話をさせていただきます。森田さんのことを、せっちゃんと呼ばせていただきます。

せっちゃんは女学校1年生で、学校はここにありました。爆心地から3.3キロメートル、各学年が2クラスだけの、上級生と下級生が仲のよい、小さな学校でした。せっちゃんのお兄さんは4人いたのですが、先ほど先生からのお話にあったように、せっちゃんたちが生まれた時からもう10年以上も続いている戦争のために、中国や朝鮮半島に出かけていました。お父さんも軍人でした。男の子には、小さい時から大きくなったら立派な軍人になってお国のために命を惜しまない、という教育が徹底的にされていました。いつ死ぬかわからないお兄さんたちです。両親はたった一人の女の子のせっちゃんに、学校の先生になることを願い、大切に育てていました。アメリカ軍は、これもご存じだと思います。初めのうちは大きな工場などを狙って爆弾を落としていたのですが、1945年の春頃から、200基、300基という爆撃機で飛んできて、東京、大阪などに焼夷弾という爆弾を落として、木造の家に火をつけ、町を焼き払うという作戦でした。広島はなぜ空襲がないのだろう。全国130の都市が検討されて、広島は常にその上位にあったわけです、第1目標として。広島も近いうちに空襲があるかもしれない。全国の軍隊を通じて、広島に空襲情報が入っていました。

大人たちは町内会や職場を単位として、防空訓練や防空訓練や、救援救護する訓練を繰り返していました。これは全国的なものでしたね。せっちゃんたちも空襲などいざというときに備えて、逃げたり集合したり、みんなで助け合っ

て、先生の指示に従って、機敏に団体行動するというのを訓練していました。せっちゃんと両親は、いつ空襲があっても走ったらすぐに家に帰れるからと、家から近い、この女学校を進学先を選びました。難しい入学試験を受けて、憧れのセーラー服が着られたのは本当ちょっとの間でした。

裁縫の時間に、ありあわせの布を持ち寄って、みんなで長袖の夏服を縫って、空襲があっても狙われないように、目立たないようにと、地味な草色に染めて着ていました。戦争が激しくなって、上級生、3年生、4年生たちはもう先生たちに守られて、工場などに出かけて、学校には来ていませんでした。せっちゃんの学校には1年生と2年生、合計4クラスしかいませんでした。上級生のいなくなった空き教室には、近くの港から戦争に行くという兵隊さんが来て泊まっていました。作業や訓練が多くなり、8月なのに夏休みではありませんでした。せっちゃんたち1年生にも、作業の命令が下りてきていました。でも、子どもたちは案外に明るく、軍歌を歌ったり、替え歌を作ったり、いろいろな遊びを工夫して、明るく生活していたということです。

8月5日、せっちゃんたち1年生と2年生、4クラス全校生徒は、ここで建物疎開作業をしていました。爆心地に非常に近い、約1キロメートルのところ。建物疎開というのは先ほどからお話しているように、空襲の時、火災が燃え広がらないように、家を壊して大きな空き地を作る作業です。もう男の人がいなくなって、女の人やお年寄り、中学1年生、2年生が動員されました。広島の中学1年生、2年生、ほとんど全員でした。

建物疎開で取り壊す家が決まると、そこに住んでいた人は、数日のうちに、どこかに引っ越さなくてははいけません。大人たちが来て、家の一番大きな柱にのこぎりを入れて、綱をかけて、よいしょ、よいしょと引っ張り、家を一気に潰します。子供たちが日の丸の鉢巻きをして、手渡して、瓦は瓦、材木は材木と片付けて、大きな空き地を作っていました。もうそのころは食べ物配給になっていました。子供たちはお腹をすかせていました。甘いお菓子などはありませんでした。瓦などを次の人に渡すとき、はい羊羹よ、お団子よ、今度は甘いチョコレート、などと精一杯明るく掛け声をかけたと日記に書いている人がいます。

5日の作業が終わって、8月6日、作業場所の変更が突然知らされました。しかし、2年生の1クラスだけは、爆心地から1キロメートルの、ここに明日も来て、建物疎開作業をするように残されてしまいました。

8月6日、せっちゃんの作業場所は爆心地から1.7キロメートルのここ、広島駅の裏、広いさつま芋畑でした。この畑は元々軍隊の訓練場でしたが、食糧が不足してきて、お決まりのように大部分がさつま芋畑になっていました。夏になって、大きく沢山伸びた草を取る作業でした。いつものように、ほんの少しの葉、三角巾などを入れた救急袋と座布団を縫い合わせたような、空襲の時に頭を守る防空頭巾、水筒を持って出かけました。お弁当は、お芋など本当に粗末な物でした。

7時過ぎ、家を出る直前、市内に家を出る直前、市内に爆撃が来るぞと警報が鳴り響きました。後で分かったことですが、広島に原爆を落とせるかどうか、エノラゲイより1時間前に、広島の天気を調べに来たB29、1機でした。天気よし、第1目標広島を攻撃せよとでも知らせたのでしょうか。B29、1機は去りました。7時半過ぎ、警報が解除されました。広島市民は、街の中に出てほっとして、戦争中ですが、夏の生活が始まっていました。集合は8時、歩いていると、とても間に合いません。せっちゃんは、普段乗せてもらえない、この列車に乗せてもらいました。

せっちゃんの学校の近くには、兵器廠、被服廠などという、軍隊の大きな建物があり、この線路は、戦争に行く兵隊や物資を運ぶための軍用の列車が走っていました。集合時刻、8時。ぎりぎりにせっちゃん達は、サツマイモ畑に到着しました。広い畑の向こうには、長くて急な石段があり、その上に神社があり、神社の後には小高い山がありました。石段の下に大きな松と、大きな石がありました。せっちゃんたち1年生が、水筒などをその石段のところに置いて、まず1年生が早く作業を済ませて、2年生に交代してもらおうと、畑に飛び出しました。2年生は、松の陰などで、思い思いにくつろいで、作業の指示を待っていました。8月6日は、とてもお天気の良い朝でした。広い畑には、暑い夏の日差しを遮るものは何もありませんでした。

草取りを始めてすぐでした。爆音が聞こえる、とあたりがざわざわしてきました。せっちゃんには爆音が聞こえませんでした。ほとんどの友達が草取りの手を止めて、空を見上げたのです。せっちゃんは上を見ませんでした。中腰でした。

せっちゃんの目の前に、突然、強い光が走りました。体全部が光に包まれて、斜め後ろから光線が体を突き抜けたような感じでした。体が宙に浮いて、気がつくと2、3メートル飛ばされて畑に突っ込んでいました。どのくらい時間が経ったのか分かりません。何が起きたのかも分からないままに、恐る恐る立ち上がりました。周りを見ると、薄暗くて夕暮れのような景色でした。下半分がうっすらと見えるのです。雑草に火がついて燃えていました。一人また一人、ゆっくりと立ち上がる友達は亡霊のような姿でした。焼けてボロボロになった服から煙が出ていました。正面から熱

戦で顔をやられた人、肩から斜めから熱線を浴びた人。顔が腫れて赤むけた皮膚を見せて、両手を前に突き出して歩いてくる姿を見て、せっちゃんは震えて声が出ませんでした。

まだ立ち上がれない友達がいました。せっちゃんは思わず、そのほうに寄って助けようと手を差し伸べました。ずるっとしました。せっちゃんの手を見ると、手から皮がむけて垂れ下がり、友達のずるずるになった皮膚と繋がっていました。ごめんなさい、ごめんなさい、と言うしかありませんでした。

みんな頑張っ、こっちにいらっしゃいと担任の先生が叫んでいました。半分くらいの友達が立ち上がって、先生のほうにゆっくりと歩きました。目が見えず、方向が分からず、手探りで歩いてくる人もいました。荷物を置いてあるところまで歩きましょう、水筒があります、頑張りましょう。先生は、立つことがやっとのような状態でした。

その先生の声に励まされ、ずるずるになった手を前に突き出して、一人一人離れたままで、よろよろと歩きました。歩き始めてすぐ、痛い、熱いと感じ始めました。松の木のところで水筒を取りました。水筒を開けられるのは、目が見えて、手が動かせる人だけでした。せっちゃんは、顔が腫れて、目が見えない友達の水筒を開け、火傷のひどい友達から水筒の水をかけてあげました。自分の水筒も開けました。最後に自分にかけてやるとすると、コップ半分も水筒は残っていませんでした。

とにかく、ここは狙われるから逃げなくては、神社の森に逃げましょうと、また森を目指しました。空の水筒だけを持って、防空頭巾も救急袋も持ちませんでした。顔が風船みたいに膨れている友達も、後ろを誰かに支えてもらいながら、一生懸命ついてきていました。森に着くと、みんな竹やぶの中に座り込み、ガタガタ全身を震わせていました。大丈夫ですか、きっと、救助が来ますよ、頑張ってくださいと先生は言いました。もうすぐ誰かが助けに来てくれると、みんな思っていました。竹やぶに逃げて30分ぐらいうると、息苦しくなりました。猛烈な吐き気でした。周りでも、みんなよく出ると思うくらい吐き続けていました。粘土を水で混ぜたような胃液でした。周りは、せっちゃんより、火傷のひどい人たちばかりでした。痛い、熱い、お水が欲しい。時間が経つにつれて、痛みが激しくなりました。少し歩けば神社のお水があるわよと、何人かの動ける2年生が立ち上がりました。せっちゃんもそれに加わりました。一つか二つの水筒を持って、一生懸命汲んできた水をお友達にかけてあげました。大丈夫よ、大丈夫よ。頑張ろうね、頑張ろうね。ありがとう、と言われました。せっちゃんは、私はまだ何かできるという気持ちになりました。

わあ、広島が燃えとるー。という声に気が付いて立ち上がると、市内中心部から黒い煙と炎が天に舞い上がっていました。自分たちだけが、ここだけが狙われたのではないと、みんな気がつきました。本当に恐ろしくなりました。

歩ける人はいますか。誰か歩ける人は、神社の下に降りてみてください。救護所ができています。先生が言いました。みんなと一緒に、ここにいたい。みんなと離れたくない。せっちゃんは、本当は怖くて怖くてたまりませんでした。でも訓練で教えられているように、誰かが助けを求めに行かなければいけないと思いました。私はまだ目が見える、2年生も一緒に行ってくれる、と思いました。

これも後でわかったことですが、混乱した1年生と2年生は、他の先生や友達と一緒に逃げたり、またはぐれてしまったり、神社の後ろの山をあてもなくさまよって、たった一人になった人もいました。六日の夜は、助けを待って、先生や友達と山で寝たという人もいましたが、もうみんなバラバラで、教えられているような団体行動はとれなくて、他の人がどうしているのか、分からなくなってきました。

せっちゃん達が神社の石段の所に来ると。石段の上は高くて急で、下の様子が丸見えでした。神社の石段を、何かうめき声を上げながら這い上がってくる人がいました。助けて、助けて、水を頂戴、せっちゃんの足を引っ張りました。せっちゃんは思わず蹴とばしました。今、思い出すと、自分より小さな子供だったように思えてなりません。その瞬間のことを、せっちゃんは今でも忘れることができないそうです。

下にある救護所の周りには、中心部から沢山の人が次々と逃げて来ていました。黒か赤か分からない人で、どんどんいっぱいになってきていました。せっちゃん達は駅に向かいました。駅の向こうはもう燃えていました。しっかりとした2年生が、線路に沿って歩けば学校に帰れるわよと言いました。最後は学校しかない、学校に帰ろう、学校に帰ろう。歩きましょうと、歩き始めました。

線路は沢山の人が歩いていました。地獄そのものでした。ポロポロに焼けて、全身火膨れになった人。ガラスが突き刺さり、血だらけの人。大人も子供も、赤ちゃんを抱いた人も、男か女か分からない姿になった人に出会いました。人間じゃない。人間じゃないと、せっちゃんは思おうとしました。見ないように、見ないように歩きました。

そして、学校に帰るためには、どうしても渡らなければいけない鉄橋に来ました。しかし普段は列車だけが走る鉄橋でした。枕木の間には、大きな隙間があります。足を踏み外したら、そのまま下に落ちてしまいます。

せっちゃんたちは手と膝をついて四つん這いになって、枕木に手を乗せ、少しずつ進みました。ところが鉄橋の下

には、黒く膨れた人、血だるまの人、息も絶え絶えの、まだ生きている人が浮いて流れてきていました。せっちゃん は心を閉ざして、人間じゃない、人間じゃない、と思いながらやっと渡りきると、座り込んでしまい、意識が遠くなりました。せっちゃんはその時、誰と一緒にだったのか。2年生や同級生の名前、何人だったのかを思い出すことができ ません。いつもそばに誰かいて、ずっと励ましていてくれた。私は誰かと一緒にいる、という感じだったそうです。 思い出したくない、酷い経験は嫌でも夢にも出ます。けれども、大切なことを思い出せないことに、焦りを感じてい ます。

だんだん、せっちゃんが知っている光景になり、学校が近づいてきました。兵器廠の近くにきた時には、2年生が、 空襲があったら爆発するかもしれないわよと考え、そばをよけて通りました。いつも見ている、学校の近くのれんこ ン畑が見えました。汚い泥水に入り、火傷の体に泥水を掛け合いました。まるで天国のように思えました。

やがてどのくらい時間が経ったのか。一人、また一人、れんこん畑から這い上がり、学校に向かって一人ずつ歩いて きました。せっちゃんがたった一人になって、学校に辿り着いたのは、8月6日は、もう夕方になっていました。

せっちゃんたちの木造校舎は、潰れていました。壊れていない校舎や運動場に、中心部から沢山の人が運ばれて、腐っ た魚のように並べられていました。ひどい匂いがしました。先生に報告しなければと思うのですが、せっちゃんには もう先生は見つけられません。どうしていいのか、どうしたら助けてもらえるのか、もうどんな考えも頭には浮かば なくなりました。

その時初めてせっちゃんは、お母さん、お母さん助けてと、お母さんのことを思い出しました。家が近い、私はも う少し、もう少し歩けば家に帰れる、家に帰りたと思いました。せっちゃんはまだ一度立ち上がり、学校の前の広 い道を、お母さん、お母さんとつぶやきながら家の方向に向かって歩き始めました。

あの子どこの子、帰ってくる子がいるよ、せっちゃんじゃない、せっちゃんだ。誰かが叫んでいると思いながら、せっ ちゃんはまだ気を失いました。町内のお母さんたちが、うちの子供たちもきっと帰ってくると、いつもの訓練のよう に救急体制を整えて、町の入り口で子供たちを待っていました。けれど、朝出かけていった町内の子供たちは3分の 1も家に帰ることができませんでした。

戦争が終わり、10月になって、やっとせっちゃんたちは学校に登校しました。さつま芋畑にいた先生も、同級生た ちも、原爆の急性障害に苦しんだ後でした。1年生は傷だらけで、髪の毛が抜けて帽子をかぶっていたり、手足の火 傷が引きつっていたり、指と指が引っ付いていたりしました。体がだるくて根気が続かず、よく授業中に鼻血を流し ました。初めのうちはお互いの無事を喜び合い、励まし合ったり、慰め合ったりしていました。けれども、もうやがて、 あまりにも辛くて、誰も原爆の話はしなくなりました。親が原爆で亡くなり、家庭の事情で大きな変化があり、学校 に来られなくなった友達もいました。

せっちゃんたちが大人になろうとする時、戦争が終わり、みんなが一生懸命に生きた時代だったのです。なのに、 被爆者に対して、理解のないいじめや、就職や結婚で差別がありました。せっちゃんもつらい経験を乗り越えて、やっ と生き延びたのに、将来に対してしっかりと希望を持つことができませんでした。学校を休んだり、授業を抜け 出したり、校則を破ったり、学校を辞めたいなとも思いました。両親とお兄さんたちに大切にされていた少女の森田 さんの人生に、その後、就職、結婚、家庭、健康、様々な節目で被爆したということが少なからず影響がありました。 親友の一人は、自ら命を絶ってしまいました。

皆さん、話が前に戻りますが、8月6日、爆心地から約1キロメートルの建物疎開作業に残されていた、2年生1 クラス、39人はどうなったと思いますか。38人が8月中にどこかで亡くなりました。たった一人、奇跡的に生き延び た少女は、被爆後に24年生きて教壇に立たれていましたが、37才、胃がんで亡くなりました。私たちを、私を中学 3年間、担任してくださいました。若い女の先生なのに、勉強には厳しかったよのうと、口の悪い男の子が言います。 ある時おしゃれをした先生と、町の中心部へバスに乗って出かけて、手紙の授業を受けたことがあります。字は上手 ではないんですけども、手紙を書くことだけはあまり苦になりません。クラスが仲良くすること、いつも工夫して くださいました。

私たちの同窓会には、先生は一度も出たことがありません。何年かに一遍は友達と同窓会をします。先生は、毎年 8月6日の慰霊祭が近づくと、原爆を、死んだ同級生のお父さんやお母さんが、私の子供は死んでしまったのに、な ぜあなたが生きているの、お考えになっているのではないかという思いに、私の先生は責めた、心に思って、いつ も苦にするとおっしゃっていました。とても辛い、ということをおっしゃっていたのが、私の先生への思い出です。 喉を痛めやすく、夏でも火傷を隠す長袖を着ていらっしやいました。ここまで、森田さんと2年生のお話をさせてい ただきました。

1945年、戦争で、原爆で12、3才の子供達までもどんな経験をしたか、その後どのような人生を歩まれたか、少しご理解していただけたのではないかと思います。

3. 被爆者：ヒロシマの願い（2分21秒，531文字）

被爆者は、こんなつらい思いは、世界のどこの誰にも、未来のほかの誰にもさせたくない、強く繰り返しおっしゃっています。森田さんは、ボンレスハムのようにしょ、触っていいよ、と子供たちの前に、火傷の跡がケロイドで硬くなった左腕を見せられることがあります。残念なことです、私たちはいつかは、直接被爆者からその体験を聞くことができなくなります。けれども、私たちは1945年、戦争で、核兵器で、原爆で、どんなことがあったのかということは忘れてはいけないと思います。

広島で育った私は、広島に撒かれた沢山の種の一つだと思います。中継ぎです。ほんのちょっとの間の中継ぎだと思っています。皆さんにお願いします。今日、広島の話をしていただいたんですが、少しでもお考えになったり、お感じになったりしたことがあれば、それを大切にしていきたいと思います。そして、いつもご自分の心で、ご自分の方法で、これから沢山のことがあると思います。戦争のない、核兵器のない、平和な世界について考え、行動してほしいと思います。

これで、森田節子さんのお話を終わりたいと思います。拙いお話を聞いていただきまして、良い機会を与えていただきまして、本当にありがとうございました。これで終わりたいと思います。

資料1-8

長崎市「交流証言者」講和 松野世菜氏（2017.7.28）文字起こし

1. 「交流証言者」を始めた動機（9分55秒，1,140文字）

松野：皆さん、こんにちは。長崎の純心大学から来ました松野世菜と申します。今回は、皆さんに山脇佳朗さんの被爆体験をお話させていただきます。よろしくお願ひします。今から被爆体験をお話していくのですが、皆さんは今までに被爆体験を直接聞いたことがありますか。聞いたことがある方、手を挙げてください。結構少ないんですね。ありがとうございます。私は長崎に生まれ育ってきて、今まで学校でたくさん戦争や平和の勉強をしてきました。そして、毎年必ず1回は、被爆者の方から直接お話を聞く機会がありました。そのような環境が当たり前で、他の県でもこのように勉強するものだと思っていましたが、実際は違いました。そのことを知ったのは私が中学3年生のときです。

突然ですが、まずいくつか質問をしたいと思います。1941年12月8日、1945年8月6日、1945年8月9日、何が起きた日か、皆さん分かりますか。1番分かる方、手を挙げてください。聞いていいですか。1番、答えていただけますか。

男1：日本時間で12月8日は、日本軍が真珠湾を攻撃した日です。

松野：ありがとうございます。そうです。1941年の12月8日は日本が真珠湾を攻撃した日で、これを機に太平洋戦争が始まりました。では、2番の1945年8月6日、分かる方、手を挙げてください。

男2：広島に原子爆弾が落とされた日です。

松野：ありがとうございます。そうです。8月6日は広島に原爆が投下された日です。では、3番の1945年8月9日は、何が起きた日か、分かる方、手を挙げてください。すみません、いいですか。

男3：長崎に原爆が落とされた日です。

松野：そうです。ありがとうございます。1945年の8月9日は、長崎に原子爆弾が投下された日です。皆さんありがとうございます。私が中学3年生のとき、平和学習の一環で、街中に出て、通りがかった方々にアンケート形式で、これと全く同じ質問をしました。アンケートを取る前は、県内の人はもちろん、県外の人にも答えられるだろうと予測していました。しかし集計してみると、結果は予想と違いました。

8月9日の分の集計結果だけになりますが、長崎に原爆が投下されたことを知っていた人は、県内の方で約9割、県外の方ではたった3割しか知りませんでした。あとの真珠湾攻撃をした日や、広島に原爆が投下された日の認知度も長崎と同じく低かったです。そのとき、戦争に関する勉強は全国共通ではないということを初めて知り、衝撃を受けました。それ以降、戦争や原爆のことを広く伝えていきたいと思うようになり、その中、この語り部の活動を知り、高校3年生のときに参加することにしました。

今回、語り部として皆さんに被爆体験をお話しますが、私は、原爆も戦争も体験したことはありません。実際に被爆された方のお話を聞いて伝える交流証言者という形でお話をしていきたいと思っています。

2. 長崎市への原爆投下とその被害（2分45秒，777文字）

長崎に原爆が投下されたのは、1945年8月9日、午前11時2分、アメリカの爆撃機B29が原爆を投下し、上空約500メートルで炸裂。約7万4千人の方が命を落とし、約7万5千人の方が負傷しました。

長崎に投下された原子爆弾の名前は、通称ファットマンです。ファットマンはプルトニウムという原料を使った爆弾で、3日前に広島に投下されたウランを原料にしたリトルボーイよりも威力が強いものでした。しかし、長崎は山に囲まれていたため、被害が拡がるのを免れることができました。それでも大きな被害が出たことには変わりはありません。8月9日、原爆が投下されたのは長崎でしたが、第1目標地は福岡県の小倉でした。しかし、前日の爆撃による大量の煙とモヤに包まれており、空からは目標の地上がよく見えなかったため、第2目標だった長崎市に落とされることになりました。

原爆の爆発によって放出したエネルギーは、まず熱線です。地表面の温度は、爆心地で3,000度から4,000度。1キロメートル離れたところでも、およそ1,800度に達し、爆心地の近くでは、原爆の熱線と、その後の火災による熱線などで、人が黒焦げになって死んでしまうほどでした。

こちらの写真をご覧ください。これは爆心地から約800メートルの場所にあった山里国民学校の校舎の写真です。この窓枠のように、鉄骨で出来た建造物などは、熱線と、次にお伝えする爆風によって、一瞬で飴のように曲がってしまうほどでした。

次に爆風です。非常に強烈で、写真のように建物を一瞬にして吹き飛ばし、破壊してしまうほどでした。2キロメートル離れた地点でも、強い台風の最大風速の約2倍の威力がありました。

そして放射線。これは高い放射線量で、爆心地から1キロメートルの遮蔽物がないところで浴びた場合、2週間以内に全員死亡すると言われるほどの量でした。では、これらを踏まえて被爆体験の話を始めたいと思います。

3. 山脇佳朗さんの被爆体験 (17分20秒, 5,081文字)

私がお話するのは、山脇佳朗さんの被爆体験です。山脇さんは、当時、国民学校、今で言う小学校の6年生で、11歳。爆心地から2キロの自宅で被爆しました。

これは同じ2キロメートルの地点で被爆された谷口稔暉さんの写真です。谷口さんは、原爆が投下されたとき、自転車に乗って郵便配達をしていました。その途中、屋外で被爆し、このように背中に大きな火傷を負いました。

山脇さんも同じ2キロメートルの地点で被爆しましたが、谷口さんのような火傷の被害は免れることができました。なぜかは、のちほどお話しします。

これは山脇さんの家族構成の図です。家族は9人で、7人兄弟でしたが、原爆が投下される前日、8月8日、山脇さんのお母さんは、妹さん2人、弟さん2人を連れて佐賀へ疎開したため、自宅には、お父さん、お兄さん、山脇さんたち双子の兄弟しか残っていませんでした。疎開というのは、空襲などに備えて都市から地方へ避難することです。8月9日、その日の朝、お父さんは仕事で浦上の工場へ、お兄さんは学徒動員で軍需工場へ行っていたので、家には山脇さんたち双子の兄弟だけでした。その日は午前中から警戒警報が鳴っていました。警戒警報が鳴っている間は、防空壕へ避難しなくてもよいのですが、やがてそれが空襲警報に変わり、避難しないといけなくなったため、山脇さんは弟と2人で防空壕へ避難しました。避難してしばらく経ったころ、空襲警報解除という声が聞こえ、防空壕を出た山脇さんたちは、家に戻り、縁側でお米を突く作業を始めました。

当時は、どこの家でもやっていたことですが、1升瓶に、配給された玄米に近いお米を入れ、棒で突き、今私たちがよく見る白いお米に近づけるための作業です。時間は10時30分ごろでした。しかし、とてもお腹が空いたので、11時少し前、早めの昼食をとることにしました。これがとても幸運だったのです。もし、縁側でそのままお米を突いていたなら、初めて見ていただいた谷口さんのように、熱線による酷い火傷を受けることになったでしょう。2人でご飯を準備して食卓に向かった瞬間、青白い冷たい光が、家の中に突き刺さり、家が揺れ、山脇さんたちはすぐに伏せました。そのとき、家の庭に爆弾が落ちたのだと思いました。しかし、目を開けて見ると、ガラスも屋根も瓦もなく、外に出ると、いつも家から見える港が、煙に包まれて見えませんでした。このとき、被害が広範囲に及んでいるということを知りました。

原爆が投下されてから1時間後、お兄さんが帰宅し、家の近くの防空壕で近所の人たちと過ごしながらか、お父さんの帰りを待っていましたが、いつまで経っても帰ってきませんでした。

近所の人から、浦上は全滅したという話を聞いた山脇さんたちは心配になり、次の日の8月10日の午後、3人で浦上にあるお父さんの工場へ向かいました。

その道のりには、たくさん死体が転がっており、黒焦げの電柱や街路樹が倒れている光景が目の前に飛び込んできました。通り道にあった小さな橋には救護所に入りきらなかったたくさんの方がずらりと並んで死んでいました。その橋を渡りたくなくて、他にも探しましたが、どこもなくて、仕方なくその橋を渡りました。川にはたくさん死体が浮いていました。その中に17歳くらいの女の人がいて、目を引きました。なぜかと言うと、長い帯のようなものをなびかせて浮いているのです。しかし、よく見ると、それは飛び出した彼女の腸だということが分かりました。それが気味悪くて、山脇さんたちは足早に橋を渡りました。川には、他にも水を求めてやってきたと思われる人々が、河原やそばの道に折り重なって死んでいるのです。どの死体も原爆で黒く焼けて膨れ上がり、目だけが白く光って気味が悪いものでした。そのような死体から目を背けて歩きたかったのですが、狭い川端の小道では足場を見つけるのがやっとで、気をつけて歩かないといけませんでした。間違えて踏もうものなら、真っ黒に焼けた肌が、ペろりと剥

げてしまうからです。やっとの思いでお父さんの工場の近くまで来たとき、先頭を歩いていたお兄さんがウワーっと言って立ちすくみました。どうしたのかと思って肩越しに覗いてみると、白い束をくわえて死んでいる男の子がいました。最初は、昼ご飯に食べたうどんが出ているのかと思いました。しかし、それは死んだ体から一斉に飛び出した無数の回虫でした。回虫というのは細長くて白い寄生虫です。それを見たあと、吐き気が襲ってきたため、一目散にお父さんの工場へと向かいました。お父さんの工場へ着くと、工場は全滅していました。焼け落ちた工場の鉄骨の下でスコップを持って作業をしている人が3人いました。そこでお兄さんが、山脇ですけど、お父さんはどこでしょうかと尋ねると、スコップを持って作業していた人が振り返って、工場長のお坊ちゃんたちですね。お父さんはあそこです。あそこで笑っておられますよと言いました。ああ、よかった、来た甲斐があったと思って、急いで指された場所に向かいます。しかし、そこにいたのはお父さんの遺体でした。口元は微笑んでいるように見えました。それを見た山脇さんたちは声が出ず、ただ呆然としていると、先ほどのスコップを持った人たちが近寄ってきて、お父さんを連れて帰りたいのなら、ここで焼かないとダメだよと言います。理由を尋ねると、近くの火葬場も破壊されて使えなくなっていると言うのです。だから、今からここで焼くか、それが嫌なら、今からここに穴を掘ってあげるから、そこに埋めるか、どっちがいい、と聞かれました。

ここに埋められてはたまらないと思った山脇さんたちは、その場で焼くことを決め、工場の人たちと、焼け残った木材を集め、お父さんの遺体を火葬することにしました。工場の焼け跡から、焼け残りの木材を集めて積み重ね、その上にお父さんの遺体を寝かせて火を放ちました。山脇さんたちは、燃え上がる炎に向かって、手を合わせて拝みました。拝み終わって、ふと見ると、炎の中にお父さんの足首から先が突き出ているのが見えて、その突き出たままのお父さんの足首を舐めている炎を見ると、涙が溢れて止まりませんでした。その様子を見た工場の人たちに、今日はもう帰りなさい、自分たちがちゃんと焼いておくから、明日また来なさい。来るときには、必ずお父さんの遺骨を入れるものを持ってくるんだよと言われ、山脇さんたちは、その日はもう帰ることにしました。工場からとぼとぼと帰っていると、お兄さんが泣き出し、それにつられて、山脇さんたちも泣き出して、3人でワーワー泣きながら、防空壕まで戻ってきました。その様子を見た近所の人たちも、お父さんが亡くなったのだと分かり、何も聞いてきませんでした。その日は防空壕で過ごし、次の日の朝、壊れた家に戻り、お父さんの遺骨を入れる梅干しのツボを持って、再び兄弟3人でお父さんの工場へ向かいました。昨日と同じ道を通っていくのですが、その日は、昨日までとは気持ちが全く違ったため、転がっている死体も怖くなく、よく周囲の状況を見られました。しかし、そのときに漂ってきた匂いが不快で、今でもそこを通ると思い出すのだそうです。そして、工場に着き、昨日お父さんを焼いたところまで3人で行きましたが、遺体がある2メートルぐらいのところで、山脇さんと弟さんは、嫌だなと立ち止まりました。どうしてかと言うと、灰の中に人の形が見えたからです。それでもお兄さんはそばに行って、火箸で灰をかき回し始めました。そして、お前たちも来い、と言われ、仕方なく2人もお父さんのほうへ行き、お兄さんといっしょに灰をかき回し始めました。しかし、やはり半焼けでした。焼けていたのは、手首から先、足首から先、お腹の一部だけ。遺体の大部分はまだ灰に塗れたままでした。これが自分のお父さんだと思うと、情けなくてしょうがありませんでした。これ以上、お父さんの遺体を見ていることができなくなった山脇さんたちは、お父さんをこのままにして帰ろう、ここにいるのはもう嫌、とお兄さんに言うと、しばらくじっと遺体を見ていたお兄さんは、そうだな、仕方がない。お父さんの頭の骨だけを取って終わりにしようかと言って、持っていた火箸で、ほんのちょっとだけ頭蓋骨の部分をコツコツと触りました。すると、頭蓋骨の部分がボロボロと崩れ、中の半焼けの脳が流れ出しました。それを見て、ここにいる勇気がなくなった山脇さんたちは、火箸を捨て、壺だけを持って一目散にそこを逃げ出しました。今になってもその情景を思い出し、もう一度焼けばよかったと後悔していると、山脇さんは言います。

数日後、佐賀に疎開していたお母さんは、新聞で、長崎にも広島と同型の爆弾が落とされたということを知りました。お母さんの弟にあたる叔父さんが、子どもたちの様子を見に行ってくるということで長崎に入り、被害が酷いのにビックリした叔父さんは、山脇さんたちを連れて、いっしょに佐賀へ向かうことにしました。道ノ尾駅というところから汽車に乗ろうとしたところ、ここからは重傷者しか乗せられないと言われました。汽車に乗れずに家に帰ると、近所の人から、諫早からなら救援列車が出ていると言われ、長崎から25キロメートル離れた諫早へ向かうことにしました。昼間は暑いので、夕方に出発しました。螢茶屋まで来た時、叔父さんがリュックから帯を取り出しました。夜道で眠くなって、道端の石や溝に足を取られないようにと、兄弟の腰にその帯を巻き、叔父さんが先頭に立って、帯を持ち、数珠のように連なって諫早まで歩きました。

夜道を歩きながら、山脇さんは、お父さんのことをお母さんにどう話そうかと考えていました。話すことを渋ったのには理由があります。山脇さんの生みの親は、山脇さんが2歳のときに亡くなり、お母さんと同じ小学校に勤務し

ていた方が育ての親になりました。そのお母さんに、お父さんの半焼けの遺体をコツコツしたら崩れたので、そのままにして逃げてしまったとは言えず、お父さんが帰って来なかったから、工場へ迎えに行ったら亡くなっていた。遺体は工場の人たちといっしょに焼いて、自分たちで骨を拾ったというようにしか伝えられませんでした。

その後、山脇さんは、国民学校、中学校を卒業し、三菱電機の技術学校に入学しました。そこで3年間勉強したのち、三菱電機の工場で働き始めました。しかし、技術学校では一般の教科の勉強が不足するため、仕事と並行しながら、市立の夜間高校へ通うようになりました。朝8時から仕事をして、それが終わって、夕方から夜9時まで夜間学校で勉強する4年間の日々は大変だったと言います。技術学校を卒業したあとは、現場に配属され、品質管理課で働くことになりました。そして26歳のときに、そこの事務所で働いていた方と結婚し、4人のお子さんに恵まれました。その間、自身の被爆体験を他の人に話すことはあまりありませんでした。山脇さんが自身の被爆体験を語り始めたのは、退職後のことでした。

そのうち外国でも話す機会がありましたが、通訳を通して話すことがまどろこっしくなったため、自分で直接話したいと思うようになります。そこから独学で英語を勉強し、英語で伝えていくためのトレーニングを始め、実際に外国で自身の被爆体験を直接自分の口から話すことができるようになりました。英語で被爆体験を語ったとき、涙を流す人もいて、直接、英語で話してよかったと言います。

そして山脇さんは、2010年の9月、外務省から非核特使に任命されました。非核特使とは、被爆体験の証言活動に取り組んできた方々に与えられる名称です。この非核特使という名称を使うことで、被爆体験を聞く人に強いアピールになったり、これからの活動で国内外の発信力を高めたりすることへ繋がります。山脇さんは、今もご自身の被爆体験を通して平和を国内外へ強く発信し続けています。原爆は、最初にもお話したように、熱線、爆風、放射線などによって様々な被害をもたらします。特に放射線は、被爆直後に脱毛や歯茎からの出血などの症状だけでなく、何十年も経ったあとに、癌などの様々な病気の症状を引き起こします。山脇さんも被爆してから50年、60年経ったあとに、癌の症状に苦しみ、いっしょに被爆した弟さんも、同じ時期に発症したそうです。このように、被爆された方々の多くが、被爆してから数十年経ったあとに病気の症状が出てくるということがあり、ずっと不安を抱えていかなければなりません。

4. 平和とは？ (6分45秒, 1,971文字)

原爆投下から70年以上が経ちましたが、今はまだ、私たちは被爆された方から直接被爆体験を聞くことができます。しかし、これはいつまでも続きません。被爆者の方の平均年齢は80歳を超えており、私たちの年代が、戦争の体験を直接聞くことができる最後の世代だと言われています。私が通っていた高校では、1年生のときに被爆者の方から直接被爆体験を聞きます。私が聞いたときは、学年全体で1人の被爆者の方のお話を聞くというスタイルでしたが、昔は1クラスに1人被爆者の方がいらっしゃって、クラスごとで被爆体験の聞き取り学習を行うというスタイルを取っていたそうです。しかし、被爆者の方が減少し、今のスタイルになったという話を、当時、先生から聞きました。そのときに、もし話を伝えていく人がいなくなったら、あの日起きたことは過去の話として消えていってしまうのではないかと考えたことを覚えています。今はまだ、直接お話を聞くことができますが、これから何十年も先になって、いつか広島と長崎に原爆が投下されたことが、こんなことあったらいいよ、というようにしか思われなくなるのではないかと不安になることがあります。らしいよ、ではなく、こんなことがあったんだよ、というふうに、きちんと後世にも伝わってほしいですし、長崎に生まれたからには、地元の過去に起こったことも知って、それを自分の子どもや、その子どもの世代にまでも、どんどんリレーのように伝えていくことが義務なのではないかと思いました。そうすれば、きっとこの事実を、正しいまま伝わっていくと思います。この活動はその一歩だと思って、私は語り部になることを決めました。ここでもう一度質問です。皆さんにとって平和とは何ですか。少し考えてみてください。考えましたか。また何人かに聞いて回ってもよろしいですか。平和って何だと思えますか。

○男4：私が考える平和とは、戦争はそうだし、人と人とが争わないで、みんなが豊かに幸せに生きていくことができることが平和だと感じます。

○松野：ありがとうございます。どうですか。

○男5：私は、すべての人が安心、安全に暮らしていけることができる環境だと思います。

○松野：ありがとうございます。すみません。いいですか。

○女1：平和というのは、違う価値観や考えを持った人たちが、お互いを尊重して、戦争を起こさないということだと思っています。

○松野：ありがとうございました。

○松野:山脇さんは、お話の中で、山脇さんが思う平和を3つ挙げました。一つ目は、戦争、暴力、いじめがないこと。二つ目は、言論、集会、出版、信仰の自由があること。そして三つ目は、貧しさがありません。皆さんもそれぞれ考えることがあると思います。私が思う平和とは、山脇さんが二つ目に挙げたことに似ていますが、発言の自由があることです。山脇さんは、戦時中は天皇を神様と考え、反抗することは許されなかったとお話していました。自由に発言ができなかったら、今、私が皆さんの前でこのようにお話をすることはできません。こういうふうに皆さんにお話を伝えられること自体が、平和だと思います。今、皆さんに答えてもらいましたが、自分が思う平和をどうやったら実現、あるいは続けることができると思いますか。もう一度よく考えてみて、それを実行に移してほしいと思います。最初にお話したように、私が語り部になろうと思ったきっかけが、県外の方の原爆投下の認知度の低さだったので、いつか県外の方にも、この原爆の話を伝えることが目標でした。今回、実際に皆さんにお話をすることができて、本当に嬉しいです。被爆地でないと、このようなお話を聞く機会は少ないかと思いますが、これを機に、戦争や原爆に対して関心や理解を深めていってほしいですし、もしいつか機会があれば、長崎の被爆以降や資料館などを実際に見に来てください。今回、私の話を聞いて何か感じてもらえたら嬉しいです。今ある平和を、これからも残していくために、1人1人ができることが必ずあります。戦争のこと、原爆のことを調べるといっただけでも十分です。それが平和への一歩に繋がります。それをぜひ実践していってほしいと思います。

最後になりますが、今回、皆さんに交流証言者として被爆体験をお話しましたが、私は身内に被爆者がいる、いわゆる被爆2世、3世ではありません。しかし、この活動は長崎出身や被爆3世でないといけないというものではありません。この活動に関心があれば、長崎市の被爆継承課へ連絡することで、誰でも参加することができます。募集は随時行っています。

ちなみに、私が9月に出演した長崎ケーブルテレビの「知っトクながさき」は、現在YouTubeでも視聴できます。講話ができるようになるまでの詳しい情報が分かりますので、ぜひご覧ください。以上で私の話は終わります。ご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

外池:松野さん、どうもありがとうございました。折角の機会なので、質疑応答であれば自由に出してください。はい、じゃ竹内君。

竹内:本日は誠にありがとうございました。秋田大学教職大学院の竹内と申します。質問が一つございます。先ほど、松野さんから藤井さんからも、原爆を後世の世代に伝えていくことが大切だと。私もそのように感じております。私は秋田県の中学校の社会科の教員を目指しているのですが、そこでも戦争についての現状と、平和について考える大切さは伝えていきたいと思うのですが。そこで、学校の子どもたちにどのようなことを伝えたほうがいいのかということや、教育に期待すること、たとえばこういうことを伝えてほしいということや、教師がこういう気持ちをもって、そういった平和について授業してほしいとか、ちょっと抽象的で申し訳ないのですが、何かありましたらお答えいただければと思います。よろしくお願ひします。

松野:私もずっと小学校のころから、学校で平和学習がちゃんと時間割に組み込まれていて、勉強してきたんですけど、原爆資料館とかに写真が展示されているんですけど、その写真って、ちょっとグロテスクな部分があったりすることもあるんですけど、いろいろニュースとかで、グロテスクだから教えないようにするっていうニュースをたまに見るんですけど、でも、それが、グロテスクだから教えないってことじゃなくて、それが実際の被爆があったときの、原爆落とされたときの実情だから、そういうことを教えないっていうんじゃないって、教えていってほしいなと思います。写真とかを見せて、こういうことがあったんだよというふうに教えてほしいと思います。

竹内：そうですね。ありがとうございます。

藤井：非常にこれは大きくて難しい問題ですし、色々あると思いますが、今のグロテスクという絵について、私もいつも使わせてもらってるんですけども、グロテスクと言っていいかどうか分からないですね。系統的に、教える側がしっかりと自分のものにしておいて、丁寧に教えれば、どんな惨い写真でも、子どもはその絵の後ろにある、描いた人の思い、あるいは家族の思い、帰らない子どもへの思い、そういうものを汲み取れるような指導が必ずできると思います。今でなくとも、その子が大きくなる過程でいろいろあると思うんですよね。だけど、それは、見た瞬間にマイナスの反応が出たとしたら、指導が悪いと思います。やっぱりちゃんと教えないといけない。それだけの力を持たないといけないと思います。非常に大きな問題だし。でも皆さんは、私たちと違って、音楽の力があるし、スポーツの力もあるし、もういろんな力が備わってますね。そういうものでしっかり教えていけると思います。平和というのは、言語だけではなく、スポーツでもあるし、音楽でもあるし、能や狂言でもやってるじゃない。野村万作だとか、平和だとかそういうこともやっている。だからいろんな方法があるし、そういう力を皆さん持っている。私は英語が話せないという話をしたんですけども。英語なんかでも素晴らしいですね。世界の子どもと繋がることによって平和を教える。だから、私たちがそういう力をつけないといけないと思います。

外池：ありがとうございました。では他に質問のある方はいらっしゃいますか。

篠田：発表、ありがとうございました。秋田大学教育科学部4年次の篠田と申します。自分からは、違った視点からお話をさせていただきたいんですけども。心境の変化っていうところで、語るということは、とても悲しいとか、辛いという気持ちであったりとか、いろんな感情を持つと私は感じています。自分も同じ立場で語るということをしたら、同じように悲しいという気持ちになると思うんですが、おふたりにお聞きしたいのは、自分が本当に悲しいとか苦しいとか、そういう気持ちを持ったときに、それでも伝えたい、語りたいという気持ちを持つときに、どういうことが突き動かすのかっていうのを、愚問かもしれないんですが、今思ってることでもいいので、お話を聞かせていただけたらと思います。

松野：これは、私が被爆体験をお話する上での心境の変化ということですか。

篠田：それもですし、実際、お聞きするじゃないですか。そういうときに、自分がいろんな感情を持つと思うんですけど、悲しいかと思って、それでも語りたいという気持ちがあるというのは、どういう気持ち突き動かすのかという。

松野：私が語り部の活動を始めたいと思った理由が、他県の方の認知度の低さだったので。実際に山脇さんからお話を聞いたとき、すごく衝撃的だったんですよ。お父さんのお話とか。それを自分が語らないといけないっていうことにすごく責任感を感じましたし、大変だなって思ったんですけども。やっぱり私は、その認知度を上げたいので、そのためにいくら辛いことでもお話をしたいなと思って始めました。

藤井：ごめんなさい。ちょっと聞こえなかったもので、よく分からない。語る私の動機ですか。

菅原：何が突き動かすということをお聞きしたくて。

藤井：ごめんなさい。私が上手く答えてないと思うんですけどね。私は、森田さんのことは、かねてから存じ上げてたんですよ。というのは、森田さんが私の恩師と同じ学校で、しかも恩師が1人生き残った女の子で、証言してらっしゃるということを知ってたわけです。それで、この募集があったときに、私は、被爆者じゃないのに、被爆体験は伝承できないという思いのほうが強かったんです。人の体験をなぜ語れるのか。体験はその人の個人だと思ってたんです。けれども、いや待って、私、先生のことも話しておきたいなという気持ちがあって、結局、手を挙げたんですけども。そして何年かの中に、こういう形になっていったんですけども、何年かの中に変化がありますよね。自分が語りたという思いの変化というものがあると。段々、戦争中の子どもの生活をもっと語って。だから、さんにお話をたく

さん聞いた中には、お父さんの話もあるし。たとえば、★★（不明）がありますね。8月8日に。光工廠も8月14日に空襲受けたんです。お兄さんは光工廠で、それまでいっしょにいた同級生の少年兵が、無残に、目の前で手と足をもがれて亡くなっている。友だちの死を、光工廠の8月14日の空襲で看取ってるんです。そのあとお兄さんは、戦後、完全にぐれてしまって、広島はヤクザの町だったんですけれども、その中に入っちゃったんです。森田さんのお兄さんが4人いたうちの。その光工廠の鉄骨が平和公園には、今、橋になって、本川橋の欄干になってるんですよ。だから、森田さんの話をするとき、そういう話も入れたかったし、お父さんが軍人のバリバリと治療するところであるとか、中心を歩いて、歩いて、森田さんを探し回るそのときに、中学生、小学生の死体を1人1人、ずるずるの遺体を起こしながらやる。そういう話も、初めのうちは入れてたんですけれども、段々私の話が変わって行って、いや、もうあの当時の12才の少女の話にしておもうと思って、そういう話になっていったですね。だから私の中でも変わってるし、森田さんから受け継いだものすべてではないんです。そういうものがあるわけです。お答えになりましたでしょうか。そういうことです。

外池：ありがとうございます。では他に何かご質問ある方はいらっしゃいますでしょうか。いらっしゃいませんか。時間はまだあります。

皆川：秋田大学教育学部3年次の皆川悠太です。この度は、お話ありがとうございました。自分は、聞いてて、平和について考える上で、心に訴えかけるものがすごく、貴重ないい経験になったというふうに感じているんですけれども、平和な世界を作っていく上で、日本だけじゃなくて、他の国々とも協力していくことが必要だと思うんですよね。これだけすごく貴重なお話っていうのを、日本だけに留めておくのも、もったいないなっていうふうに自分では思ってるんですけれども、他の国でこういったお話を展開されるっていう活動については何かあるんでしょうか、っていうのをお聞きしたかったです。

松野：私がお話を聞いた山脇さんが、実際にご自身の口で英語でお話をされているんですね。私はそういうことをしているということを知って、山脇さんのお話を受け継ぎたいって思ったんです。私自身も、今大学で英語を勉強してて、いずれは山脇さんのように英語でお話をしていきたいなって思っています。実際、日本で原爆が落とされたことが正しかったのかどうなのかっていうのは、結構、意見が割れるんですけど、外国でも、意見がいろいろあるらしくて、だから、それを英語で話すことで知ってもらいたいし、英語でコミュニケーションとすることで、他の国の方たちの意見も知れるので、そういうことで英語を学んで、生かしていきたいなって思います。

藤井：私は英語はできないので、私の分野外です。すみません。本当に英語、ダメなんです。話が半分になるんですよ。ですから、皆さんの時代です。英語で喋るっていう。ただ、こないだ、コロンビアのサントス大統領の何かで、コロンビアの指導者の中堅層の方がおいでになって、機会をいただいたんです。そしたら、このあれを、全部スペイン語にパーっと翻訳できるものがあるんですね。ソフトが。全部翻訳されまして、優秀なスペイン語の方がおつきになって、見事に、まるで日本語を話してるような感じになったこともあります。時代の進展と、もう一つは、皆さんの力です。私には手に負えません。以上です。

皆川：ありがとうございます。

外池：ありがとうございました。あと、もう1人、もしいらっしゃれば、質問等ございますでしょうか。

濱田：秋田大学教育学部の濱田と申します。この度は貴重なお話を本当にありがとうございました。私は、中学校のときに、戦争体験者、沖縄の方だったんですけど、お話を聞く機会がありまして、そのときはかなりショックと言うか、生々しい現状というものが話ではあったんですね。すごく印象に残るような経験をしました。おふたりが、語り部の活動をする中で、大切にしていることがあれば、ぜひ教えていただきたいなと思います。

松野：大切にしていることは、実際に山脇さんの被爆体験の内容もそうなんですけど、爆弾が及ぼす影響、熱線、爆風、放射線っていうのを特にちゃんと伝えられるようにと思って原稿を書いています。実際、山脇さんも、それを重点的

に伝えてほしいということだったので、さっきの藤井さんのお話の中にもあったように、原爆は、普通の爆弾と違う放射線があって、そういう放射線による被害とかもちゃんと教えていきたいなと思います。

藤井：大切にしていること、ちょっと困ったなと。いろんなことがあるようで、案外ないような状態なんですよ。あまり自分も無理はしないけども、自分の言ってることを無理強いしない。人はちゃんと成長すると思う、子どもたちは。いろんな教育の中で成長していくと思うんですよ。だから、無理強いしない、ということは言えるんじゃないかなって思います。話の中でも、最後にしっかりと押さえればいいのによって言われることもあるんです。もう少ししっかり押さえなさいよっていうことを。平和とか、核兵器とか。でも、私は自分があまり無理強いされたくないの、生徒にも、やがて大きく成長してくれると思って、無理強いしないっていうことを考えているような気がします。

外池：じゃ、本日は、藤井さん、松野さん、本当ありがとうございました。

藤井：本当にいい機会をありがとうございました。

外池：皆さん、あらためて感謝の思いで、拍手をお願いします。ありがとうございました。皆さんも、明日オープンキャンパスの忙しいときに、ありがとうございました。アンケートを最後に必ず提出していただければと思います。学生諸君は特に必ず提出してください。じゃ、本日はどうもご苦労さまでした。ありがとうございました。

<p>森田さんのエピソードを通して、原爆の恐ろしさについて改めて知ることができ、森田さんを含め一人一人の人生があることに気付きました。即死してしまっただけでなく、数カ月で亡くなった人、数年以上生き残った人、被爆者の方々など、伝えられていなかった体験が山ほどあることに気が付きました。広島で亡くなった人が12万人いられる、12万通りのエピソードがあると思えます。そのほんの一部を聞いただけで、原爆の恐ろしさは全て分かったような錯覚に陥ってしまいました。語られていないエピソードが数無数あると思うと、改めて伝承することの大切さを感じました。</p>	<p>自分より年下の人が、全く知らない人に対して講話される姿に驚きました。松野さんが交流証言者として活動したいと思った動機の中に、他県での戦争に対する認識の低さを懸念していました。戦争体験を直接語ることで、人の減少に加えて、取り組みに地域差があることも大きな問題であると思います。そのような問題を解決するために、被爆体験の伝承者や交流証言者の存在がますます重要になってくると考えます。また、松野さんが証言した山脇さんが英語を独学で勉強し、海外の人に向けて語ったことに感銘を受けました。海外の方々に向けても、メディアを通じても原爆の恐ろしさを伝えるツールが増えていると思います。</p>
<p>原爆を落された後の状況が、一人の女性の体験を通して伝わってきました。声の抑揚に感情が乗せられて聴者にもよく伝わりました。核兵器保有国は、核兵器を手元に置いておくことで顕示し、時には狡猾的に利用している。一声で核兵器を捨てたければ良いが、現実的には難しいだろう。核分裂のエネルギーは、電力にも利用されている。豊かさの追求と危険性の表裏一体をなす不安定な存在である原子力を今後人類はどう付き合っていくべきだろうか…考えさせられました。リトルボイの実寸を見せていただいたが、この大きさの爆弾が1万人以上の人を襲ったかと思うと感慨深いです。</p>	<p>「交流証言者」という初めて聞いた言葉に、自分より若い方による伝承者講話ということで、とても良い経験となり、勉強になった。若い人への戦争体験の伝承がいかに困難かということを感じた。山脇さんの父の話は中々衝撃的であった。被爆して死んでしまった方たちとの永遠に会うことのできないお話を、山脇さんの父の話は中々衝撃的であった。肉親の輩ながら決して見ることのない気持ち悪さを感じた。自分の経験したことのない本能的な恐怖を感じ取ることのできる、実のある講話だったと振り返る。認知度を上げていきたいと言っていて指導してあげれば良いと考えた。</p>
<p>原爆を落された後の状況が、一人の女性の体験を通して伝わってきました。声の抑揚に感情が乗せられて聴者にもよく伝わりました。核兵器保有国は、核兵器を手元に置いておくことで顕示し、時には狡猾的に利用している。一声で核兵器を捨てたければ良いが、現実的には難しいだろう。核分裂のエネルギーは、電力にも利用されている。豊かさの追求と危険性の表裏一体をなす不安定な存在である原子力を今後人類はどう付き合っていくべきだろうか…考えさせられました。リトルボイの実寸を見せていただいたが、この大きさの爆弾が1万人以上の人を襲ったかと思うと感慨深いです。</p>	<p>父親の骨を持って帰らなかったことを今でも後悔しているという内容にととても共感できた。満足に遺体をとむらうことができないくらい深刻な状況だった当時の長崎が伝わりました。平和とは何か？という命題は非常に深く、最後に聴者に関わったことで、自分にとっての平和は何かを考えさせられました。</p>
<p>広島市の被爆体験証言者講話は、私は2回目ですが、前回と違った場面からの語りだったので、また良い話を聞けたと思います。一番感じたことは、やはり悲慘なものだったと感ずりました。女学校の1年生の方が体験したものでしたが、想像もできないような地獄を見たということや、それを語り継いでいくことを大切にしていきたいです。また、このような悲劇を繰り返さないために、私が平和学習を行う際、できることは何か、伝えなければならぬことは何か、考えていきたいと思っています。</p>	<p>私も年下の子が講話してくれてくれたというところで楽しみにしていました。予想以上に感動しました。年が近い方の言葉だからこそ、感じる言葉の重みだとか、松野さんが今だとか、被爆体験者の方から聞いて、感じて、伝えていきたいと思つた。熱い思いが伝わってきた、遠い場所だから関係ないという考えはなくなりませんでした。ぜひ、平和学習を行う機会がある際は、今回の講話で感じたこと大切にしていきたいです。最後の質問でされた「平和とは？」という問いについて、まだまだ考えていきたいと思っています。</p>
<p>放射線についての被害が詳しく知ることができ、より原爆の悲慘さを感じました。自分が小学生の時、「はだしのゲン」の実写を見たときの光景を思い出しました。</p>	<p>長崎の被爆体験について伝えていきたいという熱意が伝わってきました。山脇さんのお話を聞くと、当時の状況やつらさがリアルに伝わってきました。松野さんの話し方も、よく伝わってくるような感じでより実感できるものでした。平和について改めて考えるよい機会になりました。</p>
<p>土崎と関連付けて、講和を始めたことが印象的と感ずりました。原爆に關して、威力や被爆について様々な情報、特に放射線という点においては原爆の特徴として詳細。節子さんの話について、現場の位置など各観的なデータから原爆の投下あたりを期に、節子さんの主観・体験的な話となり、一気に話の中に引き込まれたように思ふ。</p>	<p>被爆者の被爆時の体験のみならず、その後の半生などを含めて、一連の流れを追って話を聞くことができ、その点興味深く感ずりました。平和について考えるという点、こう言った講和では意外と珍しいように感ずる。</p>
<p>広島市の被害の惨状は知っていたが、改めて話を聞くと、やはり心に迫るものがあった。「黒い雨」が降ったという話は、今回の「語り」で始めて聞いた。原爆が投下された8月6日にも、市民はいつも通り生活をしていったということが、悲慘さを際立たせていたように感じた。</p>	<p>アンケートの結果から、原爆投下の日や真珠湾攻撃の日を多くの人が知らないことに驚いた。この記憶は風化させてはいけないため、何らかの施策をとらなければならぬと考えた。「平和について考える」ということについて、改めて考えてみるのもいいと思う。様々な価値観を持つ人たちがいる中で全ての人が「平和」に暮らしていくのはとても難しいと思う。しかし、原爆などの悲慘さを知ることが平和実現への手がかりになるのではないかと考えた。</p>
<p>藤井さんは伝承者であるが、まるで被爆者のような話しぶりだと感ずれた。それだけ感情がこもっているのだと思つた。</p>	<p>山脇さんはまだ11歳という年齢で父親の遺体を自ら焼くという経験をされたというところが衝撃的だった。後に英語で被爆体験を伝える活動を始めたことは、被爆体験を世界に発信していく上で重要な一歩だと思つた。松野さんのお話を聞いて、長崎では学校教育の中で被爆者の話を聞く機会があることに驚いた。戦争教育には地域差があることを実感した。松野さんのように、長崎出身の方はそのような戦争教育の機会を生きかし、語りとして私たちのような機会の少ない人たちに伝えてほしいと思う。</p>
<p>藤井さんは、被爆当時まだ幼い子どもであつたため、子ども視点のお話がとても新鮮だった。お話の中で、記憶が飛んでいたり、意識を失つたというところが何回かあったが、子どもが受け入れられない出来事があったのは当然であるし、その中でも覚えていてくれるだけの体験を聞けるといふのは本当にとってもありがたいことだと思つた。藤井さんは、自分も覚えていないから話を伝えられるかと思つておつちやっつけていたが、私は藤井さんのお話がすこすこ心に残つたし、もつと平和について考えたいと思つた。今後もしも話をしていく人が多くのお話を聞いていくと、もつと平和について考えたいと思つた。</p>	<p>自分より年下の人が、全く知らない人に対して講話される姿に驚きました。松野さんが交流証言者として活動したいと思った動機の中に、他県での戦争に対する認識の低さを懸念していました。戦争体験を直接語ることで、人の減少に加えて、取り組みに地域差があることも大きな問題であると思います。そのような問題を解決するために、被爆体験の伝承者や交流証言者の存在がますます重要になってくると考えます。また、松野さんが証言した山脇さんが英語を独学で勉強し、海外の人に向けて語ったことに感銘を受けました。海外の方々に向けても、メディアを通じても原爆の恐ろしさを伝えるツールが増えていると思います。</p>

